

高岡市埋蔵文化財調査概報 第54冊

石塚遺跡調査概報VI

—— 介護老人保険施設「きぼう」建設に伴う調査 ——

2003年12月

高岡市教育委員会



1. 調査区遠景（南から）



2. 調査区全景（南西から）



1. 石塚遺跡出土弥生土器



2. 石塚遺跡出土石器

高岡市埋蔵文化財調査概報 第54冊

石塚遺跡調査概報VI

—— 介護老人保険施設「きぼう」建設に伴う調査 ——

2003年12月

高岡市教育委員会

序

「石塚遺跡」は、高岡市の市街地南西部に所在する遺跡です。周辺には多くの遺跡が所在し、縄文時代から現在にいたるまで長い間、この地域では人々の生活が営まれていたものと考えられています。

この「石塚遺跡」は富山県における弥生時代研究において欠かせない重要な遺跡です。このたび、介護老人保険施設「きぼう」が建設されることとなり、それにともない埋蔵文化財の調査を実施することになりました。

今回の発掘調査により、弥生時代中期の建物跡や古墳時代前期の方墳などの遺構が検出され、また弥生土器や、磨製石剣などの遺物が出土しました。これらの成果は富山県における弥生時代から古墳時代を知るうえでも、大きな成果となるものと思われます。本書を郷土の歴史を解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、この調査にご協力いただきました、関係の皆様に感謝の意を表します。

平成15年12月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

例　　言

1. 本書は介護老人保健施設「きぼう」建設に伴い実施した石塚遺跡の埋蔵文化財調査報告である。
2. 当調査は医療法人社団正和会の委託を受け、高岡市教育委員会の監理のもと株式会社中部日本鉱業研究所が実施した。
3. 調査地は高岡市和田1055番である。
4. 現地調査は平成15年5月17日から同年6月30日まで行い、報告書作成業務は平成15年7月1日から同年12月26日まで行った。
5. 調査関係者は以下のとおりである。

高岡市教育委員会

議長： 大石 茂

副幹事： 本林弘吉

主任： 根津明義 荒井 隆

株式会社中部日本鉱業研究所

代表取締役社長： 谷崎泰秋

考古事業部長： 西井敏夫

調査員： 藤田慎一

測量士： 細川俊之

6. 調査は高岡市教育委員会の指導のもと株式会社中部日本鉱業研究所が行った。

7. 現地調査及び報告書作成においては、以下の各氏から教示を得た。(五十音順、敬称略)

石川ゆずは 林 大智 久田正弘 楠海賛子 安 英樹 吉田 広

8. 本書の執筆および編集は藤田が行った。

9. 本書における遺構の種別は下記に示す記号を用いた。

S D - 塔状遺構 S E - 井戸 S K - 上坑 S X - 不明遺構

S I - 平地式建物 S Z - 岩清墓・古墳 P - 杖穴

10. 本書における遺物番号は以下のとおりである。

1001～ 弥生土器 1500～ 石製品 2000～ 中世土師器・珠洲・陶磁器

11. 当調査の調査参加者は下記の通りである。(五十音順、敬称略)

・現地調査

岩瀬正顕 越前時男 黒田忠明 新保勝正 中沼富士大 新田三喜子 野田幸二 船木雄大 宝山紀代春

堀 清勝 堀田 肇 松沢秀雄 山崎勝 藤辺賀世子

・整理、報告書作成

今井江利子 加藤由美子 北川泰子 黒山忠男 真山恭子 高橋英史子 新田三喜子 橋 貞理子

目 次

序

例言

I 序説

遺跡の概要	1
調査にいたる経緯	3
調査経過	3

II 遺構

調査区の概要	4
弥生時代の遺構	6
古墳時代の遺構	15
中世の遺構	18

III 遺物

弥生土器	21
石製品	24
中世土器・陶磁器	25

IV 結語

結語	39
引用参考文献	40

挿図目次

第1図	石塚遺跡全体図	第14図	S I 02出土弥生土器実測図
第2図	基本層序略図	第15図	S I 02出土弥生土器実測図
第3図	調査区全体図 (1/300)	第16図	S Z 04出土弥生土器実測図
第4図	S I 02平面図および断面図	第17図	S Z 07出土弥生土器実測図
第5図	S Z 04平面図および断面図	第18図	S Z 07出土弥生土器実測図
第6図	S D 07平面図および断面図	第19図	S D 07出土弥生土器実測図
第7図	S K 01・S K 18平面図および断面図	第20図	S K 01・18・19出土弥生土器実測図
第8図	S K 20平面図および断面図	第21図	S K 20出土弥生土器実測図
第9図	S K 30平面図および断面図	第22図	S K 20出土弥生土器実測図
第10図	S Z 01平面図および断面図	第23図	S K 30出土弥生土器実測図
第11図	S Z 03平面図および断面図	第24図	その他の遺構出土弥生土器実測図
第12図	S E 01・02・03・04平面図および断面図	第25図	出土石器実測図
第13図	S E 05・06・07平面図および断面図	第26図	出土中世土器・陶磁器実測図

写真目次

卷頭1	調査区遠景（南から）		S D 07出土状況 (2)
	調査区全景（北西から）		S D 07出土状況 (3)
卷頭2	石塚遺跡出土弥生土器	図版7	S D 07出土状況 (4)
	石塚遺跡出土石器		S K 18出土状況 (1)
図版1	調査区全景（上空から）		S K 18出土状況 (2)
	調査区全景（北西から）	図版8	S K 20出土状況 (1)
図版2	S I 02完掘状況		S K 20出土状況 (2)
	S I 02出土状況 (1)		S K 20出土状況 (3)
	S I 02断面	図版9	S K 30断面
図版3	S I 02出土状況 (2)		S K 30出土状況 (1)
	S I 02出土状況 (3)		S K 30出土状況 (2)
	S I 02出土状況 (4)	図版10	S E 04曲物出土状況 (1)
図版4	S Z 04完掘状況		S E 04曲物出土状況 (2)
	S Z 04断面		作業風景
	S Z 01完掘状況	図版11	出土弥生土器 (1)
図版5	S Z 01断面	図版12	出土弥生土器 (2)
	S Z 03完掘状況	図版13	出土石器
	S Z 03断面	図版14	出土中世土器
図版6	S D 07出土状況 (1)		

表目次

表1 観察表

I 序 説

遺跡の概要（図1）

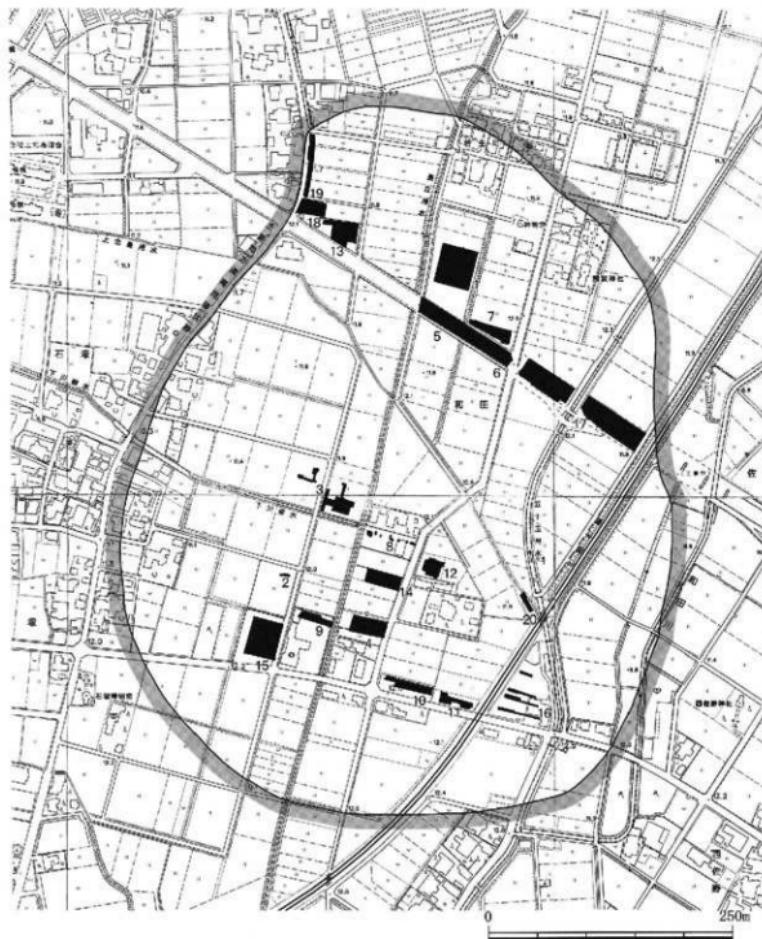
石塚遺跡は高岡市市街地の南西に位置し、旧庄川である千保川の浸食によって形成された佐野台地の北側に位置する。遺跡の範囲は東西約500m、南北約700mをはかる。現在までの発掘調査で縄文時代後期～晩期、弥生時代中期、古墳時代、奈良時代、中世の遺構・遺物が確認され、複合遺跡としての性格を帯びている。ただ、多くの遺構・遺物は弥生時代中期のものが占めており、富山県内における代表的な弥生集落としての認知は高まっている。

そして、周辺には同じく佐野台地上に立地する遺跡として、西側には中世の遺構・遺物が検出された石塚江之戸遺跡があり、東側には種子札木簡や「庄」墨書き器が出土し、多くの掘立柱建築などが検出された東木津遺跡、南側には弥生時代後期、古墳時代前期の遺構・遺物などが見つかっている下佐野遺跡などが所在する。

石塚遺跡は1957年に刊行された『高岡市史』には福田遺跡として、弥生土器のほか大型石包丁、打製石斧などが地元住民によって採集されていると紹介されている。その後、1966年から行われた農地改善事業の工事に伴い、弥生土器や炭化米が発見されたことから遺跡としての認知が高まることとなった。これを受け、1968年に高岡工芸高校地理歴史クラブOB会（オジャラ会）を中心とした発掘調査が行われ、周溝状遺構とピット10基を検出した。1973年に発刊された『富山県史（考古編）』のなかでは石塚遺跡が弥生時代の標識遺跡として提示され、北陸における弥生第II様式の遺跡として認知されるようになった。1980年からは高岡市教育委員会に専門職員が配置され、開発行為に伴う発掘調査が随時行われ、石塚遺跡の性格に関する多くの知見を得ることとなった。3基の方形周溝墓が検出された「森田地区」、「宮崎地区」、方形周溝墓と下作り工房址が確認された「高田地区」があり、「林地区」、「日本海ホーム地区」、「旭建設地区」などでは、墓と考えられている上坑が見つかっている。また、弥生時代中期以外にも、4基の古墳が確認され、石塚古墳群として認知された「都市計画道路地区」、「林地区」の調査をはじめ、縄文時代後期から晩期、古墳時代中期、奈良、中世の遺構・遺物も見つかっており、石塚遺跡は複合遺跡としての性格も帯びている。

今回の調査区は、石塚遺跡の北側に位置し、「林地区」、「都市計画道路地区」に接する。「林地区」では弥生時代中期の七坑のほか、古墳、中世の井戸などが検出され、遺物は弥生土器・土器・土製紡錘車・漆器碗・曲物・石斧・石包丁などが出土している。「都市計画道路地区」では弥生時代中期の上坑をはじめ、古墳、隙地遺構が検出され、遺物は弥生土器・土製紡錘車・磨製石斧などが出土している。これら両地区は石塚遺跡の北側で遺構・遺物が密集している地区であり、隣接する今回の調査区「きぼう地区」においてもこうした期待があり、事前の試掘調査でも「都市計画道路地区」で検出された石塚1号墳が確認され、これと切り合う古墳の周溝を確認している。

石塚遺跡は現在まで20ヶ所で調査が行われている。先にも述べたとおり、富山県の代表的な弥生集落としての認知度は高いが集落の全体構造の解明には至っていない。今回の調査も含め、弥生集落として位置づけ、石塚古墳群の全容の解明などが課題となっている。



- | | | |
|--------------------|--------------------------|----------------------|
| 1. 介護老人保健施設「さぼう」地区 | 8. 正和地区（1991年調査） | 15. 安川地区（1996年調査） |
| 2. 1967年免振調査地区 | 9. 森田地区（1991年調査） | 16. 蓬田地区（1996年調査） |
| 3. 1958年免振調査地区 | 10. 日本海ホーム地区（1991-94年調査） | 17. 1997年都市計画道路地区 |
| 4. 1971年免振調査地区 | 11. 増建設地区（1993年調査） | 18. 白石地区（1997年調査） |
| 5. 1986年都市計画道路地区 | 12. 高田地区（1993年調査） | 19. 高岡環状線地区（1998年調査） |
| 6. 1967年都市計画道路地区 | 13. 老子地区（1996年調査） | 20. 稲島地区（1998年調査） |
| 7. 林地区（1991年調査） | 14. 宮崎地区（1996年調査） | |

第1図 石塚遺跡全体図 (1/5000)

調査に至る経緯

医療法人社団正和会による介護老人保健施設「きぼう」の建設に先立ち、高岡市教育委員会文化財課へ発掘にかかる埋蔵文化財の取り扱いについての照会がなされた。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である石塚遺跡の範囲にあたるため、事前の試掘調査が行われたところ本調査をすることが必要となり、協議が行われた。

その結果、建設工事の工程等に対応するため、民間調査機関である株式会社中部日本鉱業研究所が調査を実施することで調整を行い、平成15年5月19日付の『埋蔵文化財調査に関する協定書』により、3者間での協定を締結し、現地調査を開始した。

調査経過

現地調査は平成15年5月19日から平成15年6月30日まで実施し、整理作業を平成15年12月26日まで行った。調査面積は1400m²である。

表土の除去はバックフォーで約5日間稼動した。残土は調査区域外に仮置きした。その後、国土地標に合わせたグリット杭を株式会社中部日本鉱業研究所発掘監理室において5m間隔で設定した。

遺構確認作業は1日間で、その結果、調査区全体でかなりの遺構が存在することが判明した。遺構は平地式建物1棟・方形周溝墓1基・古墳2基・土坑50基・井戸9基・溝25条・ビット400基以上・不明遺構2基であり、総遺構数は480基を超えるものとなった。

遺構掘削は略測図の作成後、約30日間行った。これと並行して遺構の断面図・平面図・出土状況図の作成と写真撮影を行った。その後、遺構の完掘写真撮影、調査区全体写真撮影を行った。

航空測量は株式会社エイ・テックが実施し、ラジコンヘリコプターにより1日で終了し、その後若干の補足作業を行い、現地調査を終了した。

出土遺物は弥生時代中期の土器・石器を中心にコンテナ24箱分が出土した。

平成15年6月30日、高岡市教育委員会による現地調査の完工検査が実施され、同年7月1日から報告書作成作業を開始した。報告書作成作業は株式会社中部日本鉱業研究所本社整理室にて行い、出土遺物の洗浄・注記・接合・実測図作成、写真台帳等の台帳作成、航空測量で作成した遺構平面図の校正および現地調査で作成した遺構断面図・平面図・出土状況図等の第二原図作成を行った。その後、図版のトレイス等を行い、平成15年11月15日に原稿を入稿し、校正作業を行い、平成15年12月26日に報告書を刊行した。

II 遺 溝

調査区の概要（図3）

調査区は、東西35m、東西40m、面積1400m²の長方形を呈している。

遺構は平地式建物、方形周溝墓、古墳、土坑、溝をはじめ480基を越える遺構が確認されているが、その大半の遺構は浅く、遺物の包含が見られなかった。これは、和田地内における圃場整備によって、遺跡全体が削平を受けたことに起因するものと思われる。こうしたなか、平地式建物1棟、方形周溝墓1基、古墳2基、多量の弥生土器が出土した土坑、溝が検出されたことは幸いであったと思われる。

遺跡の基本層序（図2）は、表十の厚さが約25～30cmをはかり、圃場整備の際に遺構面を削って形成された擾乱土が5～10cm程度の厚さであり、そして黄褐色から灰白色の粘砂質土を基盤とする遺構面が存在する。その下層には土器を包含する層は無く、灰白色砂質土、黄灰色シルトと続き、表十より120～150cmで礫層に達する。この礫層は佐野台地の形成期のものと考えられる。

調査の結果、遺構は弥生時代中期後半、古墳時代前期、中世の3時期ものが見られ、その主たるものは弥生時代中期後半であり、出土遺物の大半もこの時期のものが占めている。

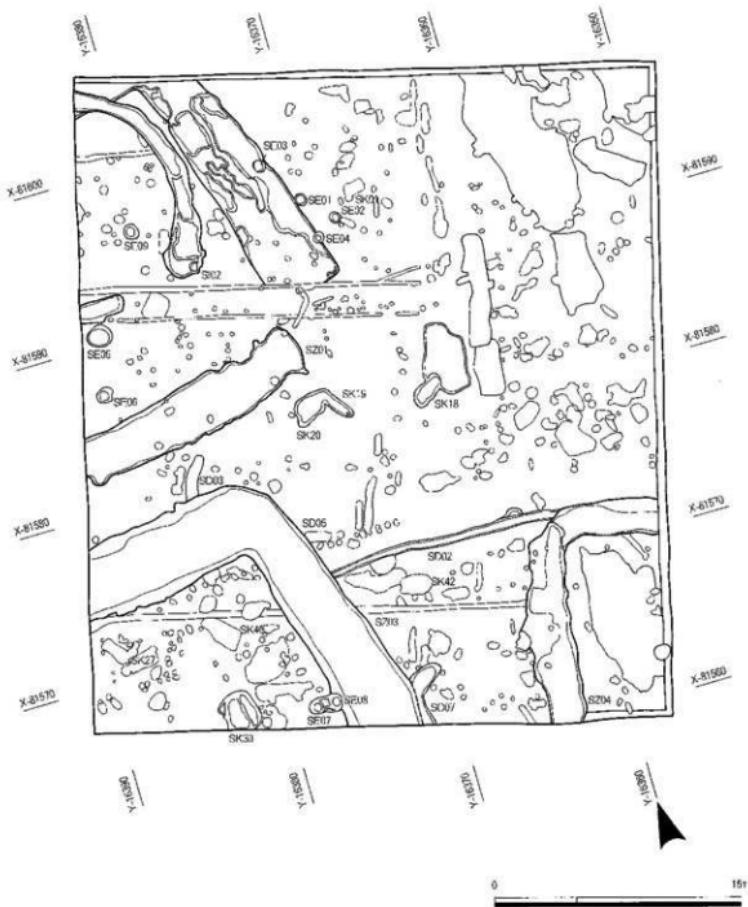
弥生時代中期後半のものとしては調査区北西隅、南東隅に検出された平地式建物S102、方形周溝墓S204、調査区の中央から南西部で検出された土坑SK18・20・30、調査区の南東部で検出された溝SD07などで、多くの弥生土器が出土している。

古墳時代前期のものとしては調査区の北西・南西部で古墳2基SZ01・03が検出されている。これらの古墳2基は隣接する林地区、都市計画道路地区に伴う発掘調査で検出された4基の古墳との関係を窺えるものであり、石塚古墳群に包括されるものと考えられる。

中世のものとしては井戸9基および、多数のピットが検出されており、中世土師器・珠洲・青磁等の遺物が出土している。

I	I 2.5G%1 オリーブ灰褐色 II 7.5%1 灰色土（含黃褐色、淡黄色ブロックまじる） III 6Y7/2 灰白色土～6Y8/4灰黄色砂質土 (かなりシルト質、しまり強) IV 2.5Y7/2 灰白色砂質土（しまり強） V 2.5Y5/1 細粒かなり含む VI 砂礫層
II	
III	
IV	
V	
VI	

第2図 基本層序略図



第3図 調査区全体図 (1/300)

弥生時代の遺構

平地式建物

S I 02 (図4)

調査区の北西部で検出された平地式建物である。北側は古墳 S Z01に切られており、北西部は調査区外となる。形状は不整円形であり、規模は推定して長軸約11.2m、短軸約10.0mをはかる。

周溝は幅約0.8~1.8m、深さ約30~50cmをはかり、南側中央は溝を設けず開口している。周溝の埋土は、上層が灰色土を主体としており、下層は黒褐色土である。上層は廃絶時あるいはそれ以降に埋没したものであり、下層は周溝が機能していた時期に埋没したものと考えられる。遺物は上層と下層のほぼ中間で出土している。周溝内遺物の出土状況は開口部分と周溝の外側から中央に向かって遺物が分布しており、周溝内側の肩部にかかる遺物はあまりない。周溝の北側で長頸壺が出土しているが、器内に上器片が入れられており、祭祀などの行為に用いられたと思われる。このほかにも、炭化物や赤彩を施した大型壺、ジョッキ形土器も出土していることから、住居としての機能が失われた時点で祭祀が行われ、土器が投棄されたものと考えられる。

周溝内側には弥生土器を伴うピットを検出し、そのうち、4基を建物の柱穴となると想定した。それぞれ、直径約30~50cm、深さ約25~40cmの規模をもち、埋土は灰色土である。P376・389では弥生土器の壺の底部が出土している。これらピットの間隔は1.6~2.0mで、六あるいは八角形状の一部をなすように配されている。これらのピットで構成される建物の規模は推定して直径約4mと考えられる。

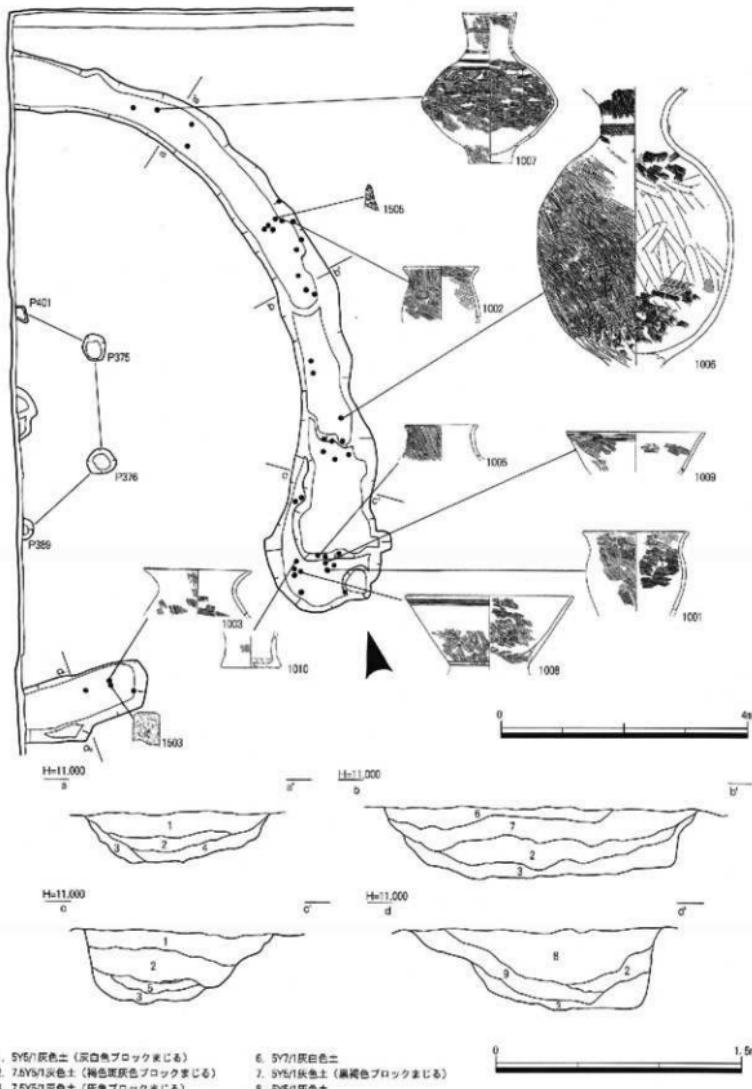
建物の中心部には灰穴炉と考えられる土坑の一部が検出されている。この土坑は大半が調査区外になっているが推定して直径1mの規模をもつ、埋土は四層に分かれ、3層には炭を含む黒色土が層を形成しており、炉としての可能性は高いものと考えらえる。

山上遺物は周溝からの遺物が大半をしめており、弥生土器、磨製石斧、石鐵がある。弥生土器は頸部に刻目貼り付け突帯をもつ大型の壺のほか、ジョッキ形土器と考えられる破片などコンテナ4箱分の土器が出土している。時期は弥生時代中期後半のものと考えられる。

石塚遺跡での建物跡の例は1968年のオジャラ会による調査で「環状遺構」として報告された周溝状遺構（上坂・上野 1967・岡本 2003）である。これは直径14mの範囲に溝が回り、中心部に6ヶ所のピットが配置されているで、溝から土師器の高壙が出土していることから、古墳時代中期のものとしている。

S I 02は石塚遺跡の弥生時代中期の住居址として始めての検出であり、高山地区 S X07玉つくり工房址を含めても、当遺跡における弥生時代の建物跡の検出は稀である。

また、北陸地方における弥生時代中期の平地式建物は、富山県内には無く、新潟県の下谷内遺跡、石川県の西念・南新保遺跡、横江古墳敷遺跡、磯部運動公園遺跡、上荒屋遺跡、丁山遺跡等で報告されている。S I 02は岡本淳一郎氏の分類によると（岡本 1997・2003）、狭構式平地建物にあたり、弥生時代中期のものでは現在、上荒屋遺跡 S B90にしか見られないものである。



第4図 S I 02平面図 (1/80) および断面図 (1/30)

方形周溝墓

S Z04 (図5)

調査区の南東部で検出された方形周溝墓である。調査区外の部分が多いが、全体の形状は方形と推定される。北側と西側の周溝が検出されており、西側周溝は溝S D02と切りあっている。盛土や主体部など、周溝内に存在した施設と考えられるものは廣場整備による削平と搅乱によって検出できなかった。また、周溝内部には窪み状の拡がりS X01やピットが検出されているが、周溝と関係するものではないと思われる。

規模は北側、西側の周溝とともに一部分しか検出されていないため、推定で一辺12m以上であると思われる。周溝の規模は、北側は幅約1.8~2.4m、深さ10~25cmをはかり、西側は幅約1.8~2.6m、深さ10~25cmをはかる。

埋土は上層が黄灰色砂質土、下層が灰色砂質土であり、若干炭灰を含んでいる。下層の埋土中から、弥生土器が出上している。

遺物は弥生土器の壺、壺、鉢等が出土している。弥生時代中期後半のもので、穀部式~專光寺式の段階を示していると考えられる。

S Z04の性格についてであるが、周溝の向きが、古墳S Z01・S Z03はおおよそ北北西方向に振れて築造されているのに対して、S Z04は北からやや東に振る形で構築されており、また、石塚古墳群の古墳とも向きが異なっている。そして、平地式建物S I 02のように周溝内に付属するような遺構も見られないことから、S Z04を今のところ方形周溝墓と考えておきたい。

石塚遺跡での方形周溝墓の類例は、1991年に調査された森田地区で溝を共有する形で3基（高岡市教育委員会 1993）、高田地区で1基（高岡市教育委員会 1995）見つかっている。これらの地区は石塚遺跡の範囲の中央部に位置している。また、近隣の宮崎地区等の土坑は上坑墓と考えられており、（高岡市教育委員会 1997）弥生時代における石塚遺跡の墓域はやや北側にも拡がるものと思われる。

溝

S D03

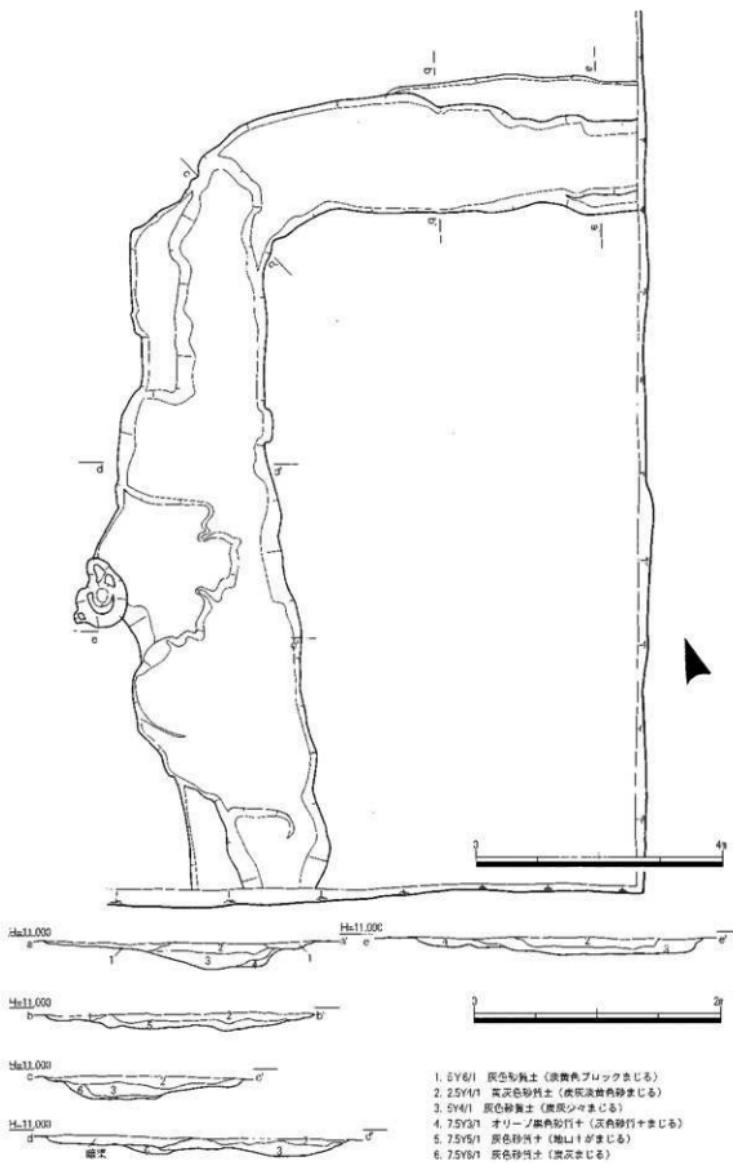
調査区の中央部で検出された溝で南側は古墳S Z03に切られている。溝の規模は幅50~70cm、深さ15~20cmをはかる。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は弥生土器が出土している。

S D07 (図6)

調査区の南側中央で検出された溝で、南半分は西側の肩部がS Z03に切られているものの東側は残存している。形状は遺構の大半が調査区外になっているため、推測であるが、やや逆L字状あるいはコの字状を呈すると思われる。溝の規模は幅1.1~1.4m、深さ40cmをはかる。埋土は三層に分かれしており、灰色土を主体としている。遺物は2層・3層から出土し、特に溝の先端部は土器を敷き詰めてられた状態で出土している。

出土遺物は弥生土器の壺、甕等が出土している。そのなかでも斜格子をハケ状工具で刻んだ貼付突帯をもつ大型壺や栗林系の壺2点が出土している。

遺構の性格としては埋土中に炭灰が混入しており、出土遺物についても、壺・壺等がかなりの量で出土し、赤色顔料を塗布したものや特殊な器種は見られないので、集落で使用された土器の廃棄の場として考えたい。



第5図 SZ04平面図(1/80)および断面図(1/40)



Hor 1:1000



1. EY6/1灰色土（スミハイ、埴山土まじる）
2. EY6/1灰色土（スミハイ、埴山土少々まじる）
3. EY4/1灰色土（ブロック、埴山土まじる）

0 1m

第6図 S D07平面図および断面図 (1/30)

土坑

S K01 (図7)

調査区の北側中央部で検出された土坑で、南東部分はピットに切られている。形状は長方形で、規模は長軸約1.3m、短軸約0.8m、深さ約10~15cmをはかる。埋土は暗灰色砂質土の単層である。遺物は弥生土器の壺1個体分が出土している。

S K18 (図7)

調査区の中央部で検出された土坑である。北側は圃場整備時の深みと考えられる搅乱に切られている。規模は長軸約2.3m、短軸約1.0mで、深さは圃場整備で上面が削平を受けているため、10~15cmと浅く、遺構検出時には土器が上面に現れていた。埋土は上層が灰褐色粘砂質土で下層が褐灰粘砂質土の二層からなる。遺物は上層より出土している。遺物は弥生土器で、壺・甕・台付鉢が見られる。

S K19

調査区中央部で検出された土坑である。西側の土坑S K20を切っている。形状は細長い楕円形で、規模は長軸約2.4m、短軸約0.7m、深さ約20cmをはかる。埋土は灰褐色土の単層である。遺物は弥生土器の甕が出土している。

S K20 (図8)

調査区の中央部で検出された土坑である。東側はS K19に切られている。規模は長軸約2.5m、短軸約1.4m、深さ約20cmをはかる。埋土は少し灰が混じった灰褐色土の単層である。遺構全体に土器が敷き詰められたような状態で出土している。この土坑は廃棄された土器とともに一度に埋められたと想定され、集落に伴う廃棄土坑と考えられる。遺物は弥生土器の壺・甕等のほか、石鎌が1点出土している。

S K27

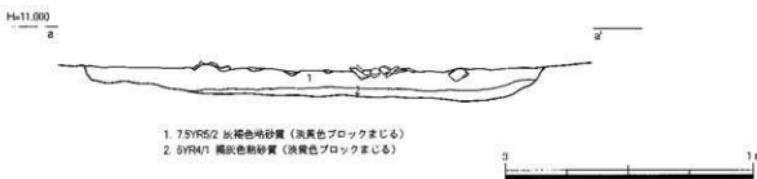
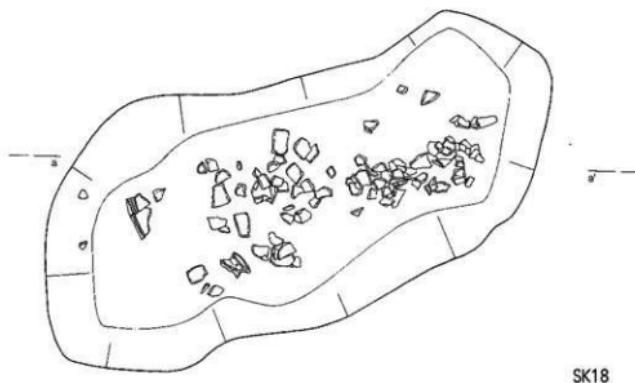
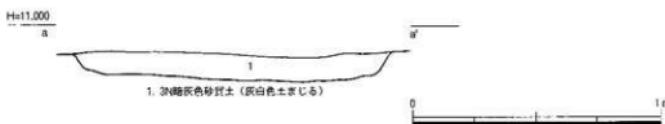
調査区南側で検出された土坑である。周辺にはS K30・40などがある。形状は楕円形を呈し、規模は長軸約1.7m、短軸約1.0m、深さ約20~30cmをはかる。埋土は三層に分かれしており、中層には黒褐色土が堆積する。遺物は弥生土器の甕・壺が出土している。

S K30 (図9)

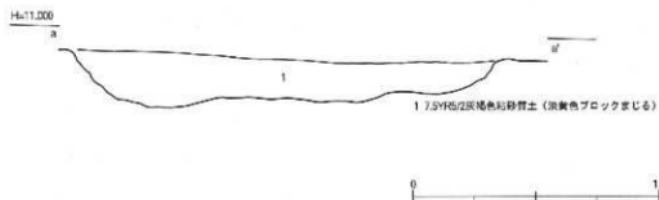
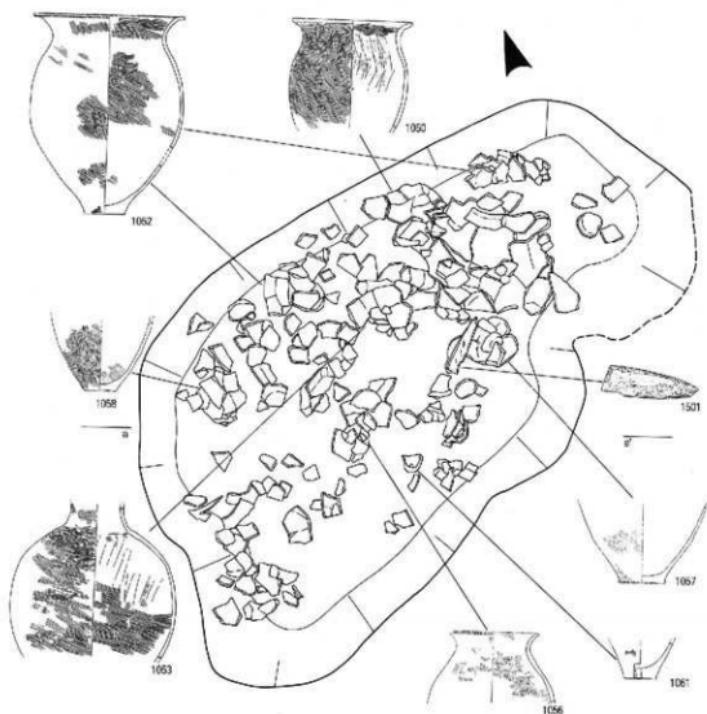
調査区の南側で検出された土坑である。南側は調査区外であるが、ほぼ長方形状を呈し、長軸推定2.7m、短軸2.1m、深さは最深部で55cmをはかる。西側は上部が噴砂によって搅乱を受けているが、下層は噴砂の影響が無くよく残っている。東側は一段高まっており、約30cmの深さである。埋土は六層に別れ、上層は灰の混じった黒褐色あるいは灰褐色土を主体とし、下層は地山に近い黄灰色シルトをベースとしている。2層から5層で多くの遺物が出土し、とくに北側部分は敷き詰められたような状態で土器が集中している。南側は散発的な状態で土器が出土している。遺物は弥生土器のほか綠色凝灰岩の石核、磨製石剣が1点出土している。土器はほぼ同一形式の範疇にあり、一度に埋められたものではないものの、同じ時期の土器が何處かにわたって埋められたものと思われる。

S K40

調査区の南側で検出された土坑である。南側にはS K30がある。形状は暗渠などに切られているが、不定形な長方形状をなす。規模は長軸約2.6m、短軸約1.1m、深さは最深部で55cmをはかる。埋土は灰褐色土の単層である。遺物は弥生土器の壺・甕が出土している。



第7図 SK01・18平面図および断面図 (1/20)



第8図 SK 20平面図および断面図 (1/20)



第9図 SK 30平面図および断面図 (1/20)

古墳時代の遺構

古墳

S Z01 (図9)

調査区の北西部で検出された古墳である。平地式建物 S I 02を切り、南側、東側、北側の一部の周溝を検出し、他は調査区外となる。古墳の盛土や主体部などは、圃場整備により削平を受けて消滅しており、周溝もかなり浅い状況で見つかっている。向きは南北方向よりやや西へ約15°振っており、規模は南東隅が削平によって失われているが、一辺約23.5mの方墳と考えられる。

周溝の規模は、南側が幅約3.0~3.4m、深さ5~24cmをはかり、東側が幅約3.0~4.5m、深さ3~24cmをはかる。北側は大半が調査区外にあるため、規模は不明である。周溝の埋土は黒色あるいは黒褐色粘質土が主体であり、古墳が機能していた時期に流れ込んできたものと考えられる。

遺物はわずかに弥生土器、砥石の破片が出土している。これらは周溝が埋没していく過程で混入したと考えられ、この古墳に伴ったと考えられる遺物はほとんどない。これは、周辺の調査で見つかった古墳と同じ状況である。

年代については、時期を特定できる遺物がないため、「都市計画道路地区」の調査で石塚古墳群の1号墳が約15°西に振れて築造されており、S Z01と軸方向がほぼ同じ方向で築造されていることから、古墳群と同時期の古墳時代前期と推測される。

S Z03 (図10)

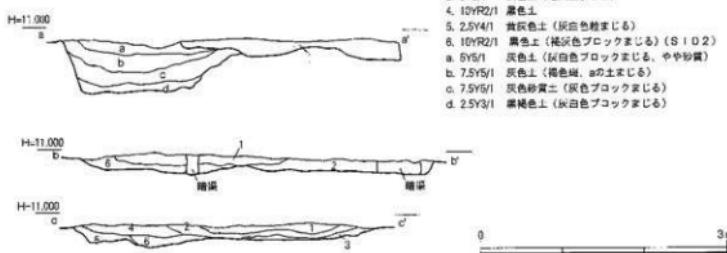
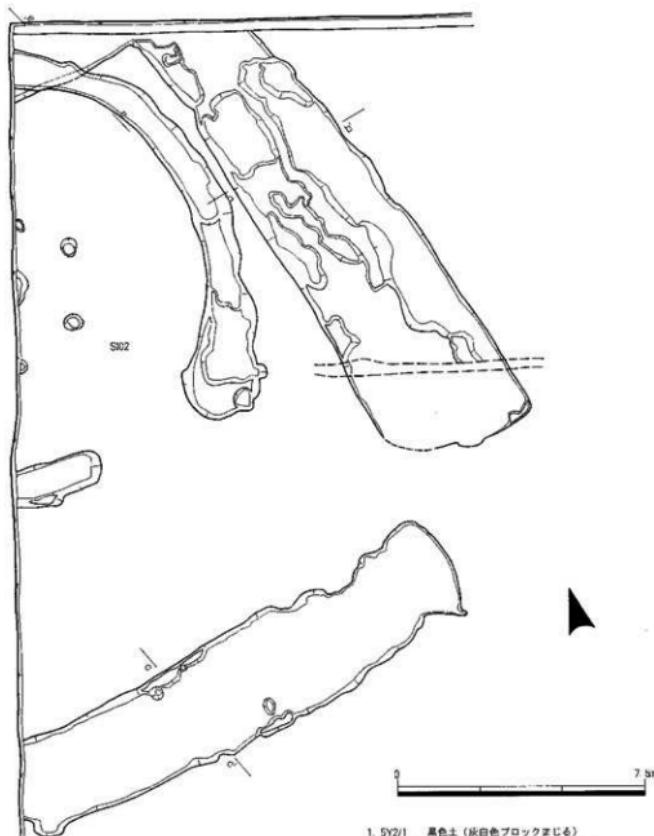
調査区の南西部で検出された古墳である。弥生時代中期と考えられる溝 S D03・05・07を切っている。北側と東側の周溝を検出し、このほかは調査区外となる。向きは南北方向よりやや西へ約16°振っており、S Z01とほぼ同じ軸方向を示している。

古墳の盛土などの施設は、S Z01と同じく圃場整備による削平を受けて残っていないが、溝の残存状況はよい。規模は北側が幅約3.0~4.8m、深さ約15~45cmをはかり、東側が幅約3.6~4.3m、深さ約20~50cmをはかる。周溝の埋土は上層が黒色あるいは黒褐色の粘質土、中層は灰色粘質土、下層は有機物が帶状に広がった黒色あるいは暗灰色の粘質土で堆積している。

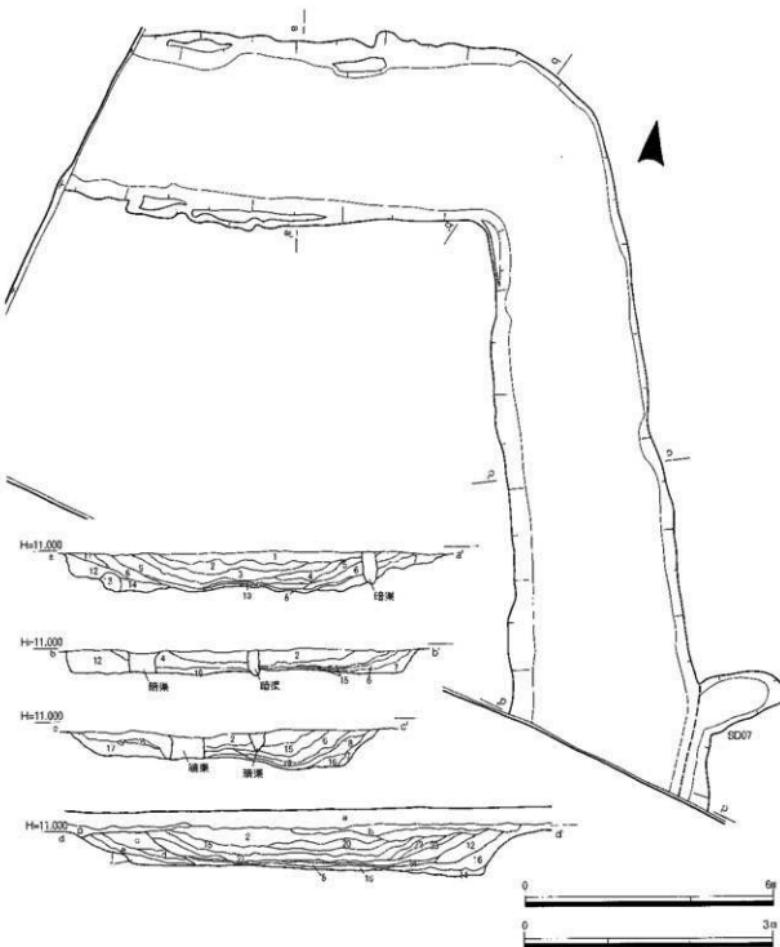
遺物は古墳に伴う遺物が見られず、混入の遺物が多く、弥生土器、珠洲、青磁、中世土師器等が出土している。弥生土器は周溝東側で多くが出土している。これは古墳築造時に弥生時代中期の溝 S D07を切っており、その際に混入したものと考えられる。出土した十器の中には栗林系の土器と思われる壺の破片などが見られる。中世の遺物は周溝の上層から中層で出土しており、後世の流れ込みによるものと考えられる。

古墳の規模は、試掘調査でこの古墳のものと思われる南側周溝の一部と南東隅が検出されており、これを元に推定一辺26.5mの方墳と考えたい。これは、石塚古墳群のなかで最大の規模を有する古墳となる。また、規模の点から後方部が1辺22mの前方後方墳と推定された石塚1号墳（高岡市教育委員会 2001）は方墳の可能性も窺える。

また、年代は古墳に伴う遺物が無いため特定は難しいが、試掘調査で確認された南東隅が、石塚1号墳と新旧関係は判別出来なかったが切りあっていること、古墳の輪方向がS Z01や石塚1号墳とほぼ同じ方向で向いていることから、同時期の古墳時代前期と考えたい。



第10図 SZO 1 平面図 (1/150) および断面図 (1/60)



- | | | |
|----------------------------------|----------------------------------|--|
| 1. 2SY2/1 黒色粘質土 (黒色土まじる) | 11. 7SY4/1 深灰色粘土 (褐色地まじる) | 21. 3N 膨張粘土 (灰化土まじる) |
| 2. 2SY3/1 黑色粘质土 (黑色土まじる) | 12. 7SY3/1 オリーブ褐色土 (地山土かなりまじる) | 22. SY5/1 灰化土 (やや砂質) |
| 3. 2SY3/1 黑色粘质土 (しだり強) | 13. 10Y6/1 暗色粘質土 (シルト質深) | 23. SY5/2 灰オリーブ色土 (黑色土まじる) |
| 4. SY3/1 オリーブ黑色粘质土
(黒變黄色土まじる) | 14. 2SY6/1 (地山土かなりまじる) | 24. SY5/6 灰化土 (黑色土まじる) |
| 5. SY5/1 灰色粘质土 (にじいろい黄色地まじる) | 15. SY4/1 暗色粘質土 (黑色地まじる) | a. 2SY6/6 オリーブ灰色土一表土 |
| 6. 10Y6/2 灰オリーブ色土(スミハイまじる) | 16. 10Y5/1 暗色粘質土 (淡黄色地まじる) シルト質強 | b. 7SY5/1 灰化土 (深黄色地淡黄色ブロックまじる)
(SD07) |
| 7. 7SY5/1 黑色粘质土 (灰白色、砂礫まじる) | 17. 7SY3/1 オリーブ色土 | c. SY6/4 灰化土 (スミハイ)。地山上まじる |
| 8. SY2/1 黑色粘质土 (有機物を含む) | 18. 7SY6/2 灰オリーブ色土 (深黄色土まじる) | d. 10Y6/6 灰色粘土 |
| 9. SY2/1 黑色粘质土 (オリーブ黑色土まじる) | 19. SY4/2 灰オリーブ色粘质土 (灰白色土まじる) | e. SY6/6 灰色土 (スミハイまじる) |
| 10. 7SY4/1 灰色粘质土 | 20. 10Y4/1 灰色粘质土 (灰白色地まじる) | f. SY4/1 灰化土 (地山土まじる) |

第11図 S Z O 3 平面図 (1/120) および断面図 (1/60)

中世の遺構

井戸

S E01 (図12)

調査区の北側で検出された井戸である。断面形は方形で、規模は長軸約75cm、短軸70cm、深さ約90cmをはかる。上層の埋土は褐灰色砂質土で、下層は黒色粘質土である。上層の堆積が30~40cmにわたっているため、廃絶時に一度に埋められたと考えられる。遺物は上層より珠洲の擂鉢が出土している。

S E02 (図12)

調査区の北側で検出された井戸で、S E01が近接する。断面形は方形で、規模は長軸約70cm、短軸約65cm、深さ約65cmをはかる。素掘りのもので埋設物はない。下層の湧水点付近に小礫の散乱が見られ、元々は礫が敷かれていたと考えられる。上層は褐灰色砂質土で30cm以上にわたっているため、一度に埋められたものと考えられる。遺物は珠洲の甕、上師器皿が出土している。

S E03 (図12)

調査区中央東側で検出された井戸で、古墳S Z01を切って検出された。断面形は不定形で、下部は掘方が崩れて袋状を呈する。規模は長軸約80cm、短軸約70cm、深さ約75cmをはかる。素掘りのもので埋設物はない。埋土は上層、下層とともに黒色粘質土であり、焼土や炭灰を多く伴っている。遺物は弥生土器が出土しており、流れ込みによるものと考えられる。

S E04 (図12)

調査区中央部で検出された井戸である。断面形は不定形で、下部はS E03と同じく袋状となる。規模は長軸約65cm、短軸約60cm、深さ90cmをはかる。埋設物は、湧水点に底を抜いた曲物が井戸側として設置されていた。曲物は1段のみで、周囲には礫が散乱している。曲物は取り上げ時に土圧と劣化のため破損し、実測することが出来なかつたが、直径約30cm、高さ約25cmのもので、2枚の板を曲げて丸くし、桜の木の皮で縫って作られたものである。このほか、砥石と箸状木製品の破片が出土している。

S E05 (図13)

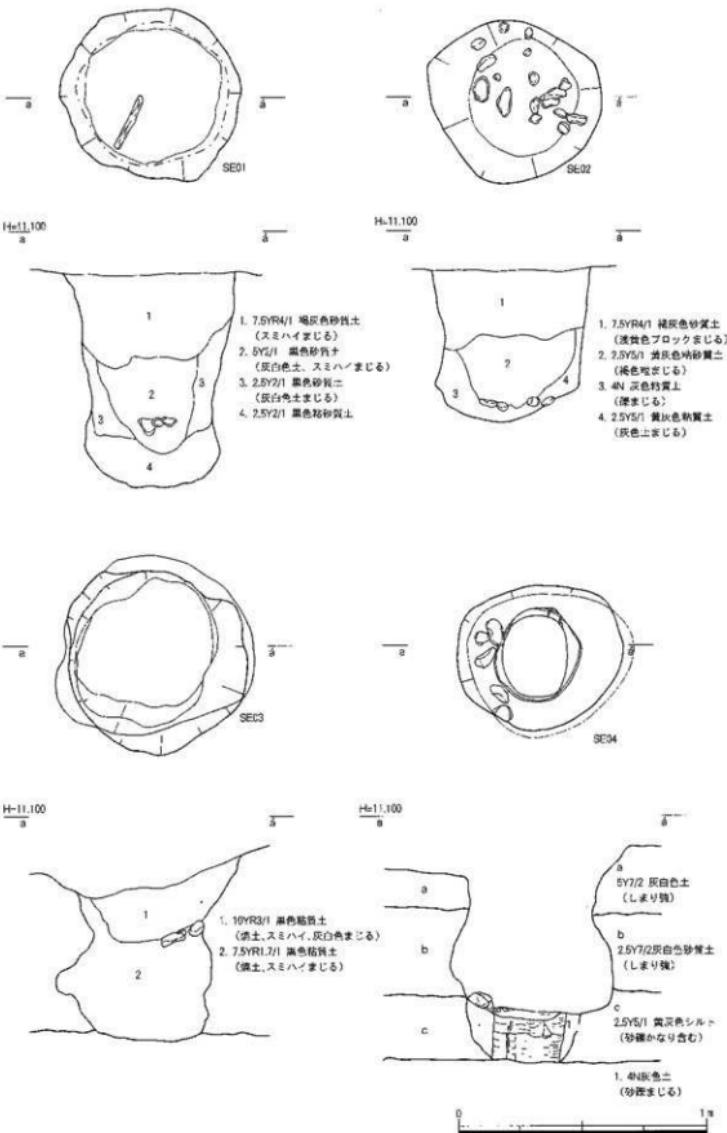
調査区西側中央部で検出された井戸である。南側にはS E06が近接する。断面形は方形をなす。規模は長軸約150cm、短軸約130cm、深さ約70cmをはかる。下層では礫が散乱しているが、掘方層に達しているため、混入したものと考える。遺物は上層から土師器皿1点が出土している。

S E06 (図13)

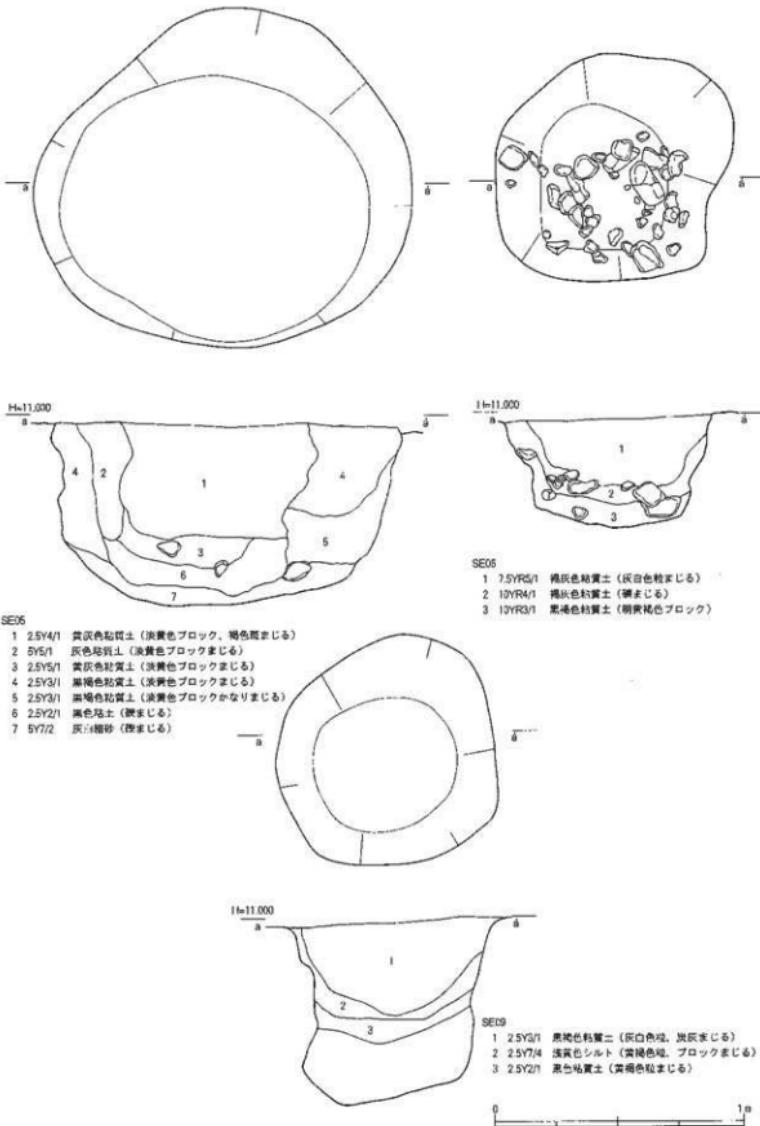
調査区西側中央部で検出された井戸である。北側にはS E05が近接する。断面形はやや方形に近く、規模は長軸約95cm、短軸約80cm、深さ約45cmをはかる。下層では礫が散乱しており、曲物などの埋設物があった可能性が高い。遺物は上層より、土師器皿が1点出土している。

S E09 (図13)

調査区北西部で検出された井戸である。平地式建物S I 02上に造られている。断面形は方形で、規模は長軸約95cm、短軸85cm、深さ70cmをはかる。素掘りのもので埋設物はない。上層は他の井戸と同じく廃絶時に一度に埋められたものと考えられる。遺物は石鉢が1点出土している。



第12図 S E 01-02-03-04平面図および断面図 (1 / 20)



第13図 S E 05・06・09平面図および断面図 (1/20)

III 遺 物

今回出土した遺物は弥生土器・土師器・珠洲・石製品・木製品などコンテナ数に換算して約24箱分であった。本章では遺構出土の遺物を中心に述べていきたいと思う。

弥生土器・土製品 (1001~1088)

弥生土器は今回の調査で出土した遺物の大半をしめており、平地式建物S 102をはじめ、溝SD 07や上坑から多くの弥生土器が出土している。他地域からの搬入品は見られず、胎土に海綿骨針を含んだ在地産のものである。時期としては弥生時代中期後半を示していると考えられる。その特色としては甕の口縁部に波状口縁が顕著に見られず、指頭押圧によって作り出された小波状口縁が若干見られる程度である。壺には広口壺・無頸壺・長頸壺などを見られ、頸部に刻み目貼付突帯をめぐらすもの、外面全体にミガキ調整を施すものが見られる。鉢は台付のものもあり、口縁に凹線や沈線を回らし、台部には木の目沈線や穿孔を施すものがある。また、連弧文や楕文を施した栗林系土器も若干出土している。このほか、壺・甕の底部にケズリ調整を施すものが顕著に見られるのも、今回出土した弥生土器の特色である。土製品については円盤状土製品が1点出土している。

S 102 (1001~1015)

甕・壺・台付鉢・ジョッキ型土器などの器種が見られる。文様は刻み目貼付突帯や櫛描文波状文・直線文が見られる。

1004は長頸壺である。頸部は口縁に向かってラップ状にのび、端部はナデによって稜がはつきりした段状となる。調整は外面上にタテ方向のハケメ、内面の口縁部にはヨコ方向のナデを施す。

1006は大型壺で、口縁部と底部が欠損している。体部は卵球状を呈しており、頸部は窄まって、下部には狭い刻み目斜格子貼付突帯が回らされている。外面上の調整は頸部にタテ方向のハケメ、体部には全面にハケメを施した後、ミガキ、そして赤彩を施す。内面は体部上半と下部にヨコ方向のハケメ、中位にタテ方向のケズリを施す。

1007は長頸甕である。体部はソロバン玉状に屈曲する。頸部から口縁端部に向かってやや外傾して伸びるものである。外面上の頸部、体部上半、底部はタテ方向のハケメ、体部の下半はヨコ方向、ナナメ方向のハケメを施した後、頸部に櫛描直線文、体部上半に荒い櫛描直線文と波状文を交互に施す。このような壺について、今までの石塚遺跡での調査では見受けられないタイプのものであり、他地域からの影響によって作られたものと思われる。

1008は台付鉢である。鉢部は大きく直線的に口縁部を開くもので、口縁端部に4条の平行沈線、鉢と台の接合部に2条の平行沈線をめぐらす。外面上にはタテ方向のハケメを施した後、鉢部下半にミガキを若干施す。内面は上部にヨコ方向のハケメを施す。

1009は口縁端部に3条の沈線をめぐらす。外面上にはナナメ方向のハケメを施し、内面にはヨコ方向のハケメを施す。

1010はジョッキ型土器の底部と考えられるものである。底部からほぼ直線にのびる形状である。外面上はミガキ調整を行った後、器面全体に赤彩を施す。また、底部と体部下半との接合面には指頭压痕が残る。

1015は円盤状土製品と思われる。土器を転用して作られており、側面の角を打ち欠きながら円形に仕上げたものである。裏面の中心には穴を開けようとした打ち欠きの痕が見られ、土製紡錘市の

木製品とも考えられる。

S Z04 (1016~1024)

壺、甕、高杯、台付鉢などの器種が見られる。文様はバリエーションに富み、斜行短線文・連続指突文・櫛描綾杉文・刻み目貼付突帯が見られる。

1016は壺である。口縁部はやや肥厚して外反し、端部は工具を押し付けて波状口縁を作り出す。調整は体部外側にタテ方向のハケメを1段あるいは2段施した後、その下部よりナナメ方向のハケメを底部に向かって施す。内面は体部上半にヨコ方向のハケメを施す。

1018は甕である。口縁部は端部付近で外反し、口唇面を形成するものである。口縁部内面には連続指突文を文様として施している。調整は外面にナナメ方向のハケメ、内面にヨコ方向のハケメを施す。底部には焼成前にあけたと思われる穿孔が見られる。

1021は無頸壺である。体部はやや上半で屈曲し、内傾して口縁部に向かってのびている。口縁部には2孔の穿孔が見られ、反対側にも同じく2孔の穿孔があったと思われる。体部上半は内外面とともにヨコ方向のハケメ、下半は外面にタテ方向のハケメを施す。

1022は頸部がかなりすぼまり、口縁部にむかってラッパ状にひろがる細頭長頸壺と思われる。頸部にタテ方向のハケメを施す。体部上半には外面にミガキ、内面にはヨコ方向のハケメを施す。このような形状の壺は中部高地で見られるものでこの土器も栗林系上器の範疇に入るものと考えられる。

1023は広口壺で、体部の大半は欠損している。口縁は端部で大きく開き、やや肥厚する。外面に回線を2条、内面には3段に斜行短線文を施す。頸部には3条の沈線、肩部に3条木の目沈線文を回らせている。調整は頸部にタテ方向のハケメを施す。

1024は鉢である。口縁部はやや肥厚して内傾し、外面には櫛描綾杉文が連続して施されている。内面には指頭圧痕が残る。調整は内外面ともにナナメ方向のハケメを施す。

S D07 (1025~1039)

壺、甕、鉢などの器種が見られる。とくに甕と大型壺の出土が顕著である。S Z04と同じく、文様はバリエーションに富み、櫛描綾杉文・木の目沈線文・竹管文・刻み目貼付突帯・連弧文などが見られる。

1029は壺である。口縁部の外面に刻み目、内面に櫛描綾杉文を連続して施す。調整は体部外側にヨコあるいはナナメ方向のハケメ、内面にはヨコ方向のハケメを施す。

1031は大型壺の頸部である。口縁部の内面に櫛描綾杉文を連続して施す。外面にはハケ状工具によるナナメ方向の刻み目を貼付突帯上にめぐらせてている。調整は外面がナナメ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメを施す。

1033は台付鉢の底部である。7条の木の目沈線文を施し、下には竹管文を周囲にめぐらせている。

1034は甕である。口縁部は、くの字状に外反し、胴があり張らないものである。口縁部は指頭押圧によって小波状口縁が作られている。口縁部と体部の屈曲部に補修のためにあけられた孔が2孔、底部には外側より焼成前に穿たれた孔が見られる。調整は外面にナナメ方向のハケメ、内面は体部上半にヨコ方向、下半にナナメ方向、底部にヨコ方向のハケメを施す。

1036は甕である。口縁部は、くの字状に外反し、1034と同じく胴があり張らないものである。口縁部は外面に刻み目を施す。調整は外面にタテ方向あるいはナナメ方向のハケメを施し、内面は口縁部にヨコ方向のハケメ、体部はナナメ方向のハケメを施した後、下半をナデによって消されて

いる。

1037は壺である。口縁部は内面の指頭押圧によって小波状口縁状に作られている。外面の調整は口縁部から体部上半にかけてナナメ方向のハケメ、下半にはタテ方向のミガキ、底部にはタテ方向のハケメを施す。内面は口縁部から体部上半にかけてヨコあるいはナナメ方向のハケメを施す。下半はナナメ方向のハケメを施した後、ナデによって消されている。

1038は栗林系の壺である。体部の屈曲部分が残存している。外面には縞文を施したあと、3条の平行沈線と4条の連弧文をめぐらせていている。内面にはヨコ方向のハケメを施す。

1039は大型壺である。口縁部は欠損し、頸部には刻み目斜格子貼付突帯をめぐらす。体部は卵球状を呈している。調整は頸部外面が突帯を貼り付ける前にタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメを施す。体部外面は上部から中位にかけてヨコあるいはナナメ方向のハケメ、下部はタテ方向のハケメ、底面にはケズリを施す。内面は上半にヨコ方向のハケメの後、ナデによって消されている。中位ではヨコあるいはナナメ方向のハケメ、下部はナナメ方向のハケメの後ナデによって消されている。

SK01 (1040)

1個体分の壺が出土している。1045は壺である。口縁端部を波状口縁に作り出している。調整は内外面ともにハケメ調整であり、頸部と体部の接合部にはタテ方向のハケメの後、ナデを施す。

SK18 (1041～1045)

壺・壺・台付鉢などが出土している。1044は台付鉢の鉢部である。口縁部は肥厚し、3条の沈線を施す。調整は外面がナナメあるいはタテ方向のハケメを施す。内面は磨耗のため調整不明である。

1045は台付鉢の台部である。下部にヨコ方向のナデを施し、8ヶ所に穿孔を施す。鉢部との接合部分には指頭圧痕が残る。内面はナナメ方向のケズリを施す。

SK19 (1046～1049)

壺などが出土している。1046は壺である。体部はあまり張り出さないもので口縁部は外反し、端部に波状口縁を作り出している。調整は外面の口縁部にタテ方向のハケメ、体部にナナメ方向のハケメを施す。内面は口縁部から体部上半にかけてヨコ方向のハケメ、下半にはナナメ方向のハケメ、タテ方向のケズリを施す。

1047は壺の口縁部である。口縁端部は細く、つまみあがっている形状であり、やや受口気味である。

SK20 (1050～1061)

壺・壺などが出土している。文様で連続した櫛描綾杉文、刻み目が見られ、口縁形態では受口あるいは波状口縁が見られる。また、壺の体部全体にミガキを施すものがあり、越中や頸城地域でよく見られるものである。

1050は壺である。口縁部は大きく開き、端部をつまみ上げて受口状をなす。調整は外面の頸部から体部上半にかけてタテ方向のハケメ、中位から下部にかけてナナメ方向のハケメを施す。内面は頸部との接合部にヨコ方向のハケメ、体部上半にはタテ方向のケズリを施す。

1051は壺である。口縁部はやや外反し、内面には櫛描綾杉文を連続して施文している。調整は外面の口縁部がヨコ方向のハケメ、頸部との接合部はタテ方向のハケメを施す。体部は内面にヨコ方向のハケメを施す。

1052は壺である。口縁部は肥厚して大きく開き、端部は面取り状となる。体部は卵球状を呈す。

口縁部は外面に小波状口縁を形成し、内面に連続指突文を施している。調整は外側頭部にタテ方向のハケメ、体部はタテあるいはナナメ方向のハケメを施した後、ナデによって消されている。内面は口縁部にヨコ方向のハケメ、体部にはヨコあるいはナナメ方向のハケメを施し、外面と同じくナデによってハケメを消している。

1053は壺である。頸部から上と底部が欠損している。体部はやや球臘状をなし、細くなった頸部がつくものである。調整は外面にハケメの後、ミガキを全体に施す。内面は体部下半にヨコ方向のハケメ、上半はタテ方向のケズリが見られる。

S K30 (1065~1074)

壺・壺などが出上している。文様は口縁部に櫛描綾杉文や刻み目、波状口縁が見られる。

1065は甕である。口縁部は肥厚して外反し、端部に刻み目をめぐらせている。体部は中位よりやや上で最大径となり、底部に向かってやや直線気味に窄まっていく。調整は外面の頸部にタテ方向のハケメ、上半から下半にかけてヨコ方向のハケメ、下半から底部に向かってタテ方向のハケメを施す。下半についてはナデでハケメを消している。内面は体部上半にヨコ方向のハケメを施す。中位から底部にかけてはハケメの後、ナデで消している。

1067は甕である。口縁部は外反する。口縁の内面には櫛描綾杉文を周囲にめぐらせる。調整は外面の体部上半にはタテ方向のハケメ、下半はヨコ方向のハケメを施す。内面は上半にヨコ方向のハケメで、下半にはタテ方向のケズリを施す。

1068は壺である。口縁部は外反し、端部を工具で押さえることによって小波状口縁を作り出している。口縁付近はタテ方向のハケメを施すがナデによって消されている。体部上半は内外面ともにヨコ方向のハケメ、下半は外面にヨコ方向のハケメ、内面にはケズリが見られる。底面にはケズリを全体に施す。

その他の遺構 (1082~1096)

前記の遺構に比べると出土量は見られず、また、底部などが散発的に出土しているものがほとんどである。しかし、S K42では鉢が出土し、S Z03からS D07を切った際の混入と思われるが栗林系の壺が出土している。

1077はS K27より出土した甕である。口縁部はゆるやかに外反し、端部は面取り状となる。口縁の外面に刻み目が内面に連続指突文が施され、頸部には2条の沈線がめぐらされる。調整は外面がナナメ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメを施す。

1080はS Z03より出土した栗林系の壺の破片である。繩文を施した後、5条の連弧文、4条の沈線文を施す。

1081はS K42より出土した鉢である。底部より上方に向かって直線的に大きく開く形状のものである。口縁部分は肥厚し、刻み目を格子状に連続してめぐらせている。調整は内面にケズリ、外面にはミガキが見られる。底面全体にケズリを施す。

石製品 (1501~1507)

S 102より石錐・磨製石斧、S K20では石錐、S K30では磨製石剣と緑色凝灰岩系の石核が出上している。また、表土掘削時に大型石包丁が見つかっている。石錐は県内では2例目であり、他の石製品についてもあまり県内では類例が見られないものである。砥石は中世の井戸S E06より出土したものである。

1501は石錐である。安山岩系の石材で作られており、長さ16.0cm、最大幅5.0cm、厚さ0.9cmをは

かる。右面は刃部を形成しており、刃面には使用による光沢面が見られる。また、基部にはタール状の付着物が見られ、柄を装着する際に接着剤として用いられた可能性がある。左面には成形時の研磨の痕跡や使用痕もなく、刃部も形成されていない。基部下縁には柄を意識したと考えられる平坦面が見られる。また、刃面や端部に2次加工と思われる痕跡が見られるが石戈など武器形製品への再加工と当初は考えていたがその意図は見られず、本稿では石鎧に何らかの再加工を受けたものと考えたい。

1502は大型石包丁である。残長11.2cm、幅7.0cm、厚さ0.9cmをはかる。凝灰岩系の石材を使用し、刃は直刃で両面を研いで作り出している。全体的に荒い研磨が見られ、刃部とその付近では細かい研磨の跡が見られる。孔は両側から穿孔されており、一部は欠損しているものの直径約1.5cmの大きさをもつ。県内での類例としては、石塚遺跡のほか高岡市・福岡町下老子篠川遺跡、大門町布目沢北遺跡などで見られる。

1503は扁平片刃石斧である。長さ5.5cm、刃部幅4.2cm、厚さ1.1cmをはかる。小型の製品で、蛇紋岩製である。器面全体に研磨のあとが見られる。裏側には擦切具による痕跡が明瞭に見られ、製作時における失敗あるいは再利用途中のものとも考えられる。

1504は磨製石剣である。粘板岩製であり、茎の部分に穿孔の痕跡が見られることから、破損した石剣を再利用して造られたと考えられる。大きさは長さ8.0cm、最大幅2.9cm、厚さ0.8cmであり、刃部も長さ5.0cmと小型のものである。刃部全体を研磨し、鎌と両刃を作り出し、茎は両側を細かく打ち欠いて形状を整えている。こうした小型の石剣は、上越市吹上遺跡や金沢市矢木ジワリ遺跡、富来町富来城跡などで類例が見られる。

1505は石鎧である。流紋岩製であり、基部の一部を欠いているものの、形状は無茎式であると考えられる。長さ3.3cm、最大幅1.4cm、厚さ0.6cmをはかる。

1506は緑色凝灰岩系の石核である。研磨の痕は見られず、裏面には自然面が残っている。玉作りの際に良質の部分が取り出されて土坑に廻棄されたものと考える。

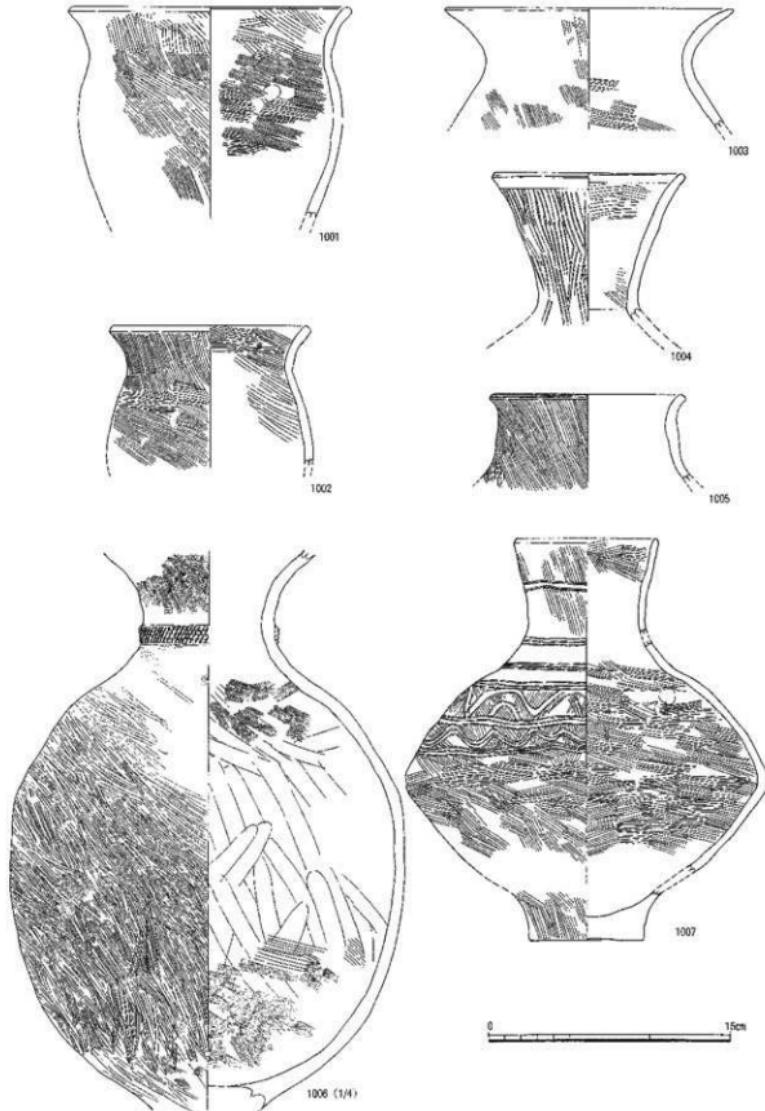
1507は砾石である。石材についてはよくわからない。4面のうち3面が使用され、本来は四角柱状であったが使用により、先端部が三角形状をなしている。

中世土器・陶磁器（2001～2016）

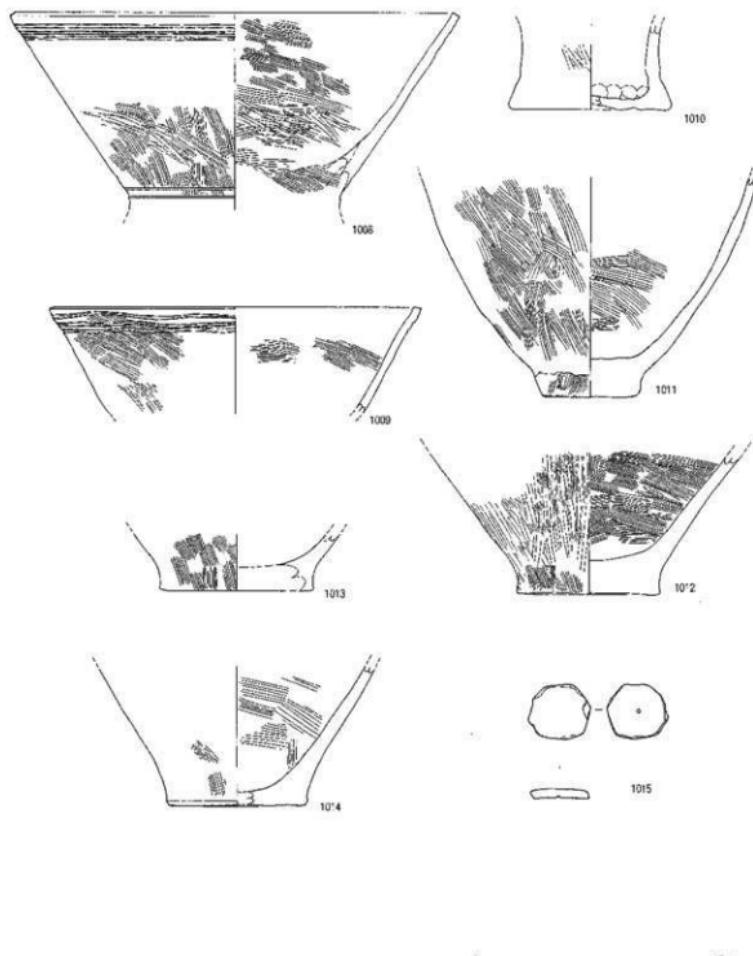
上師器皿、青磁碗、珠洲甕・擂鉢が井戸を中心に出土している。土師器皿は手づくね成形でつくられており、調整は内外面に1段、ナデをめぐらせ、内底面は一方向ナデ、外底面は不調整で指頭圧痕が残るタイプのものと口縁端部と体部の2段にナデをめぐらせ、内底面は一方向ナデ、外底面は不調整で指頭圧痕が残るもののが見られる。年代についてはおおよそ13世紀代のものと考えられる。珠洲は擂鉢・甕とともに吉岡編年II期の製品と考えられ、13世紀前半のものと考えられる。

2003は土師器皿である。口縁部はやや外傾し、端部はやや丸みを帯びている。端部と体部の内外面に2段ナデを施しており、ナデの強い押さえによって底部に明瞭な稜が造られているものである。2004、2005、2007も同様のタイプと思われる。

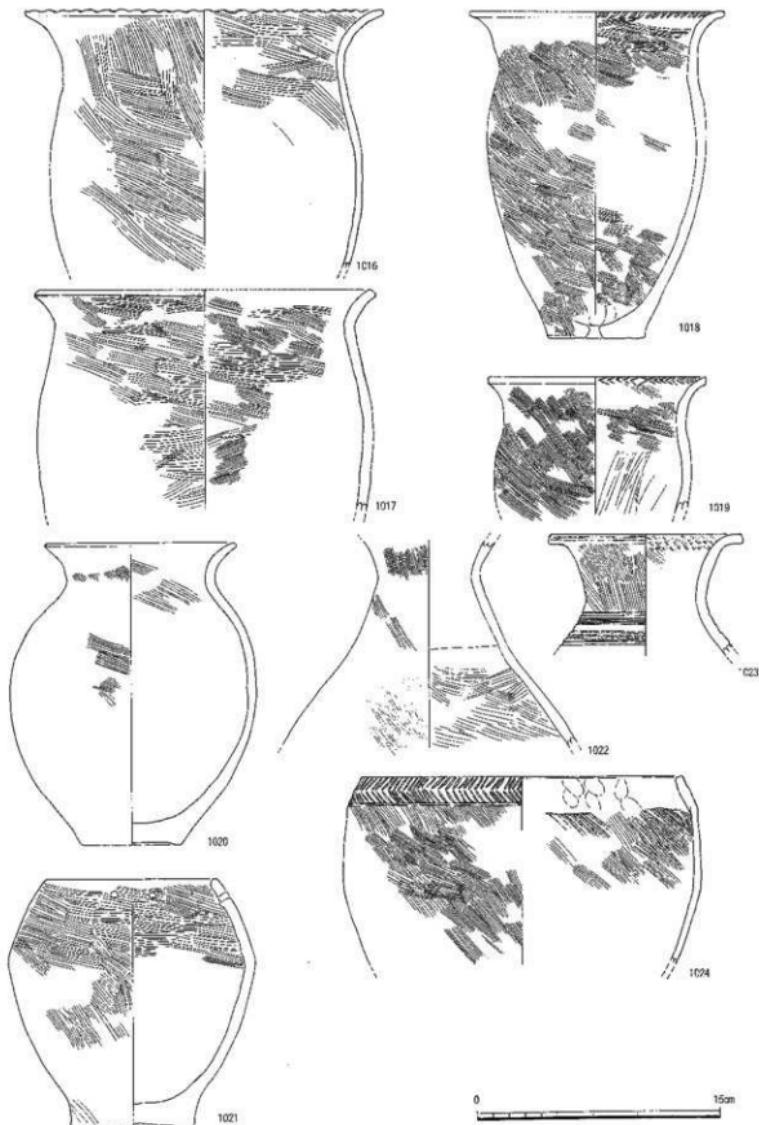
2014は青磁碗である。龍泉窯系の製品で、外間に錦連弁文が施され、内面は無文のものである。底部はケズリ出し高台である。太宰府分類の碗III類にあたり、13世紀代のものである。



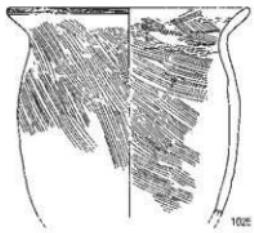
第14図 S I 02出土弥生土器実測図 (1 / 3)



第15図 S I 02出土弥生土器実測図 (1 / 3)



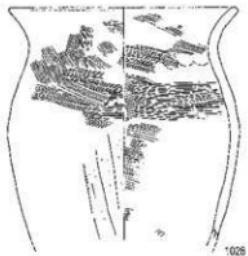
第16図 S Z04出土弥生土器実測図 (1 / 3)



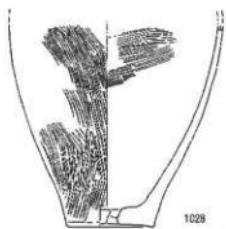
1025



1027



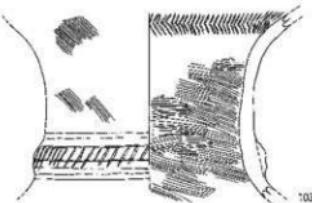
1026



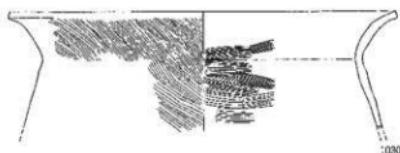
1028



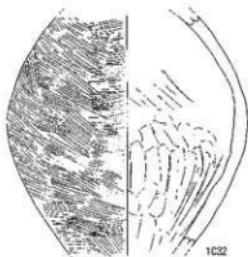
1029



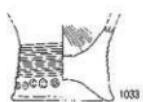
1031



1030



1032



1033



第17図 S D07出土弥生土器実測図 (1 / 3)

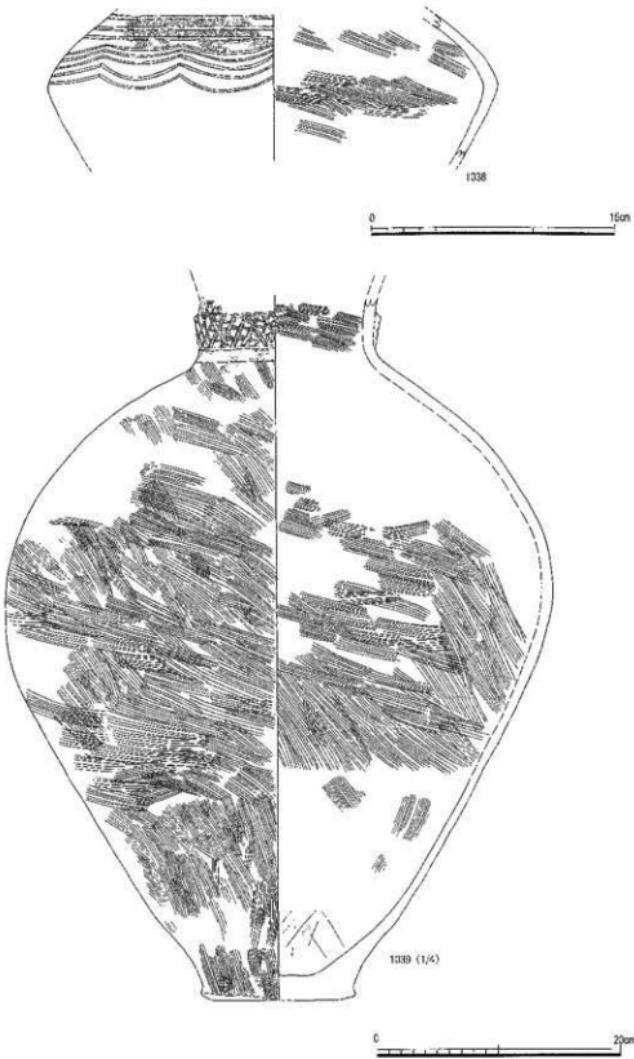


0 15cm

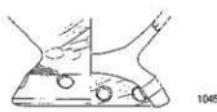
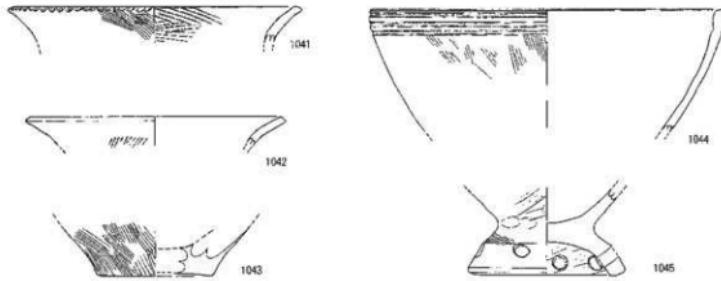
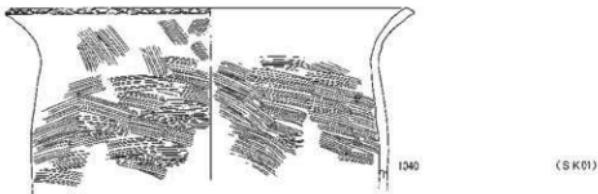


0 25cm

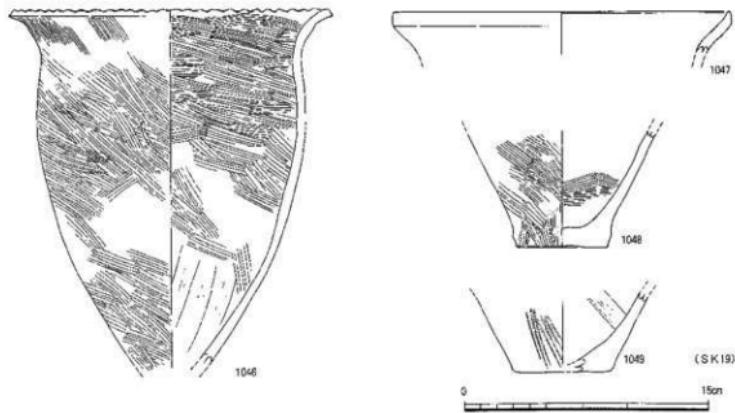
第18図 SD07出土弥生土器実測図（1／3）（1／4）



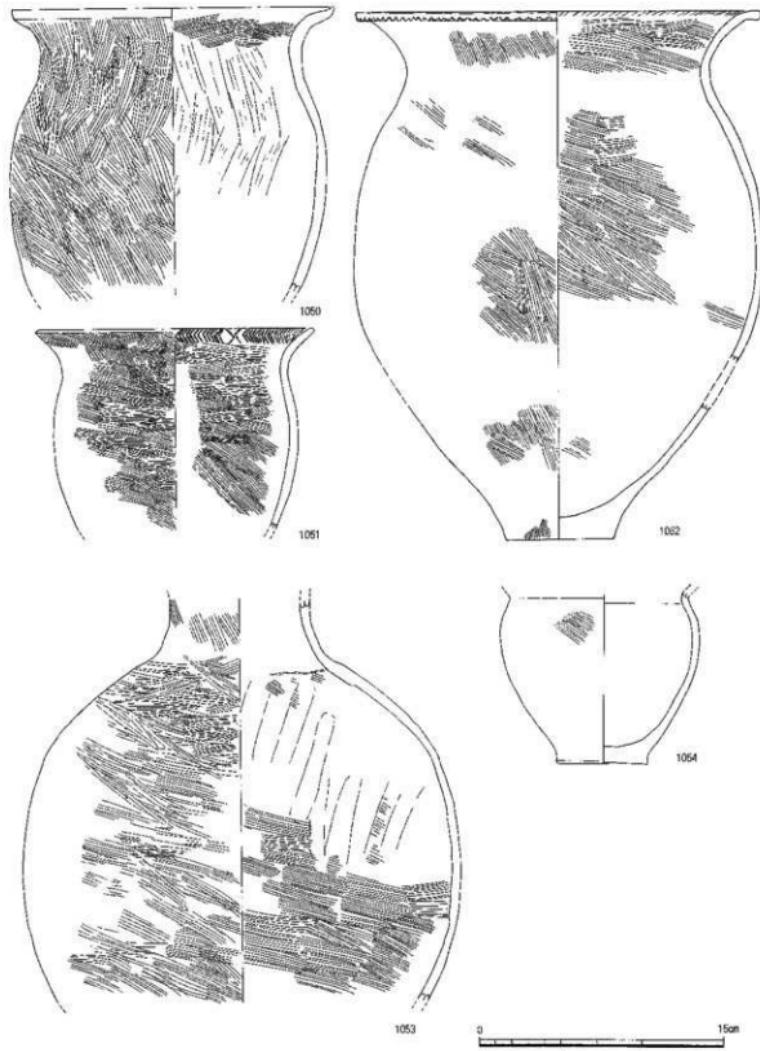
第19図 S D07出土弥生土器実測図 (1/3) (1/4)



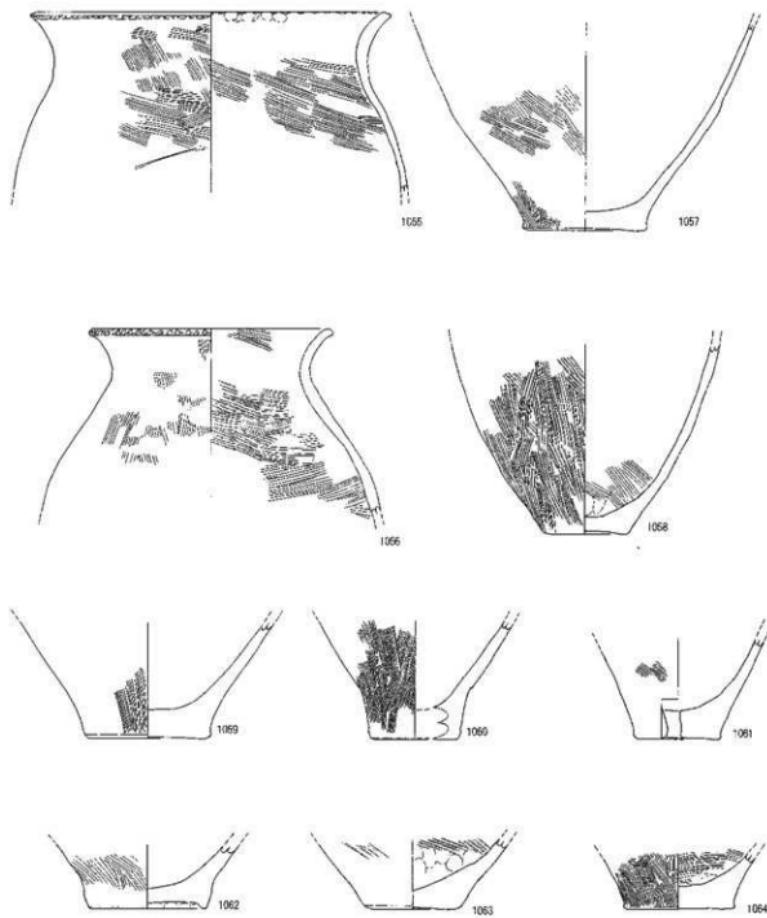
(SK18)



第20図 SK01・18・19出土弥生土器実測図

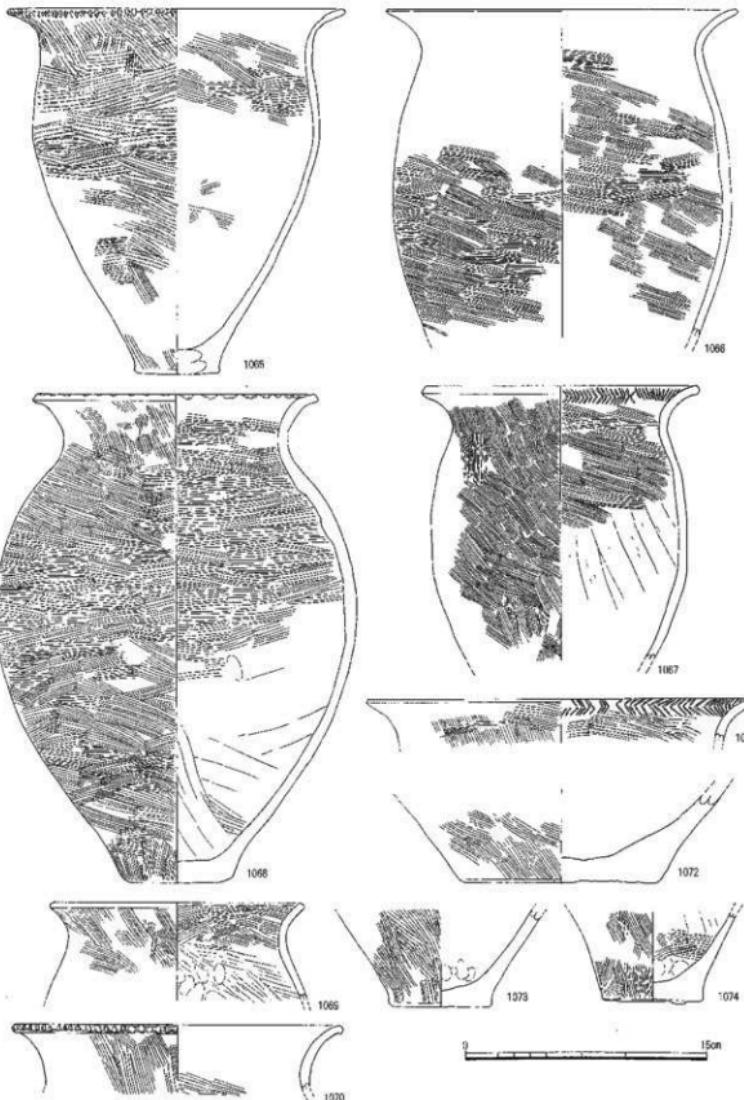


第21図 S K20出土弥生土器実測図（1／3）

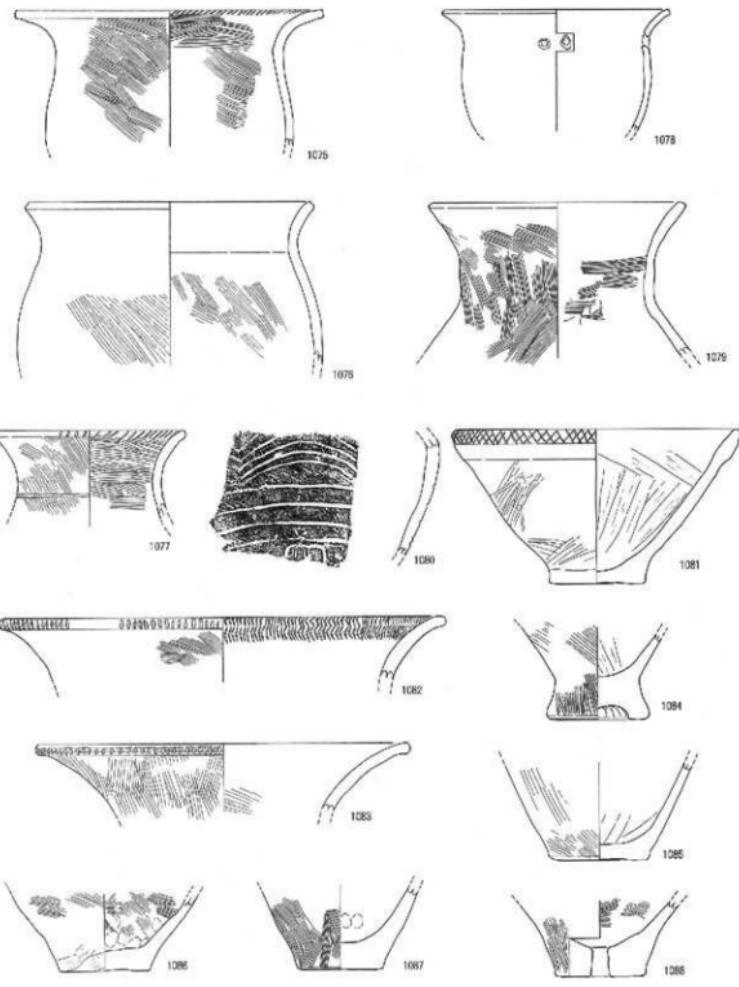


0 15cm

第22図 SK 20出土弥生土器実測図 (1 / 3)

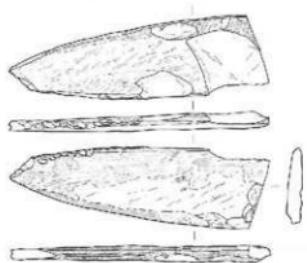


第23図 SK 30出土弥生土器実測図 (1 / 3)

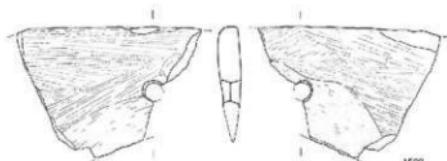


0 15cm

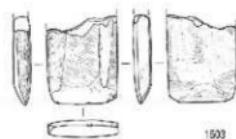
第24図 その他の遣構出土弥生土器実測図 (1 / 3)



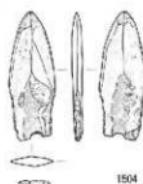
1501



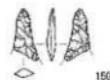
1502



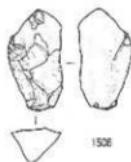
1503



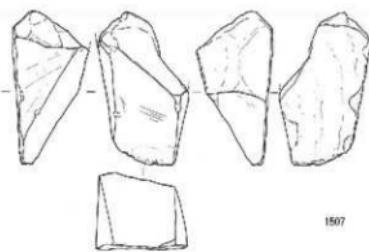
1504



1505



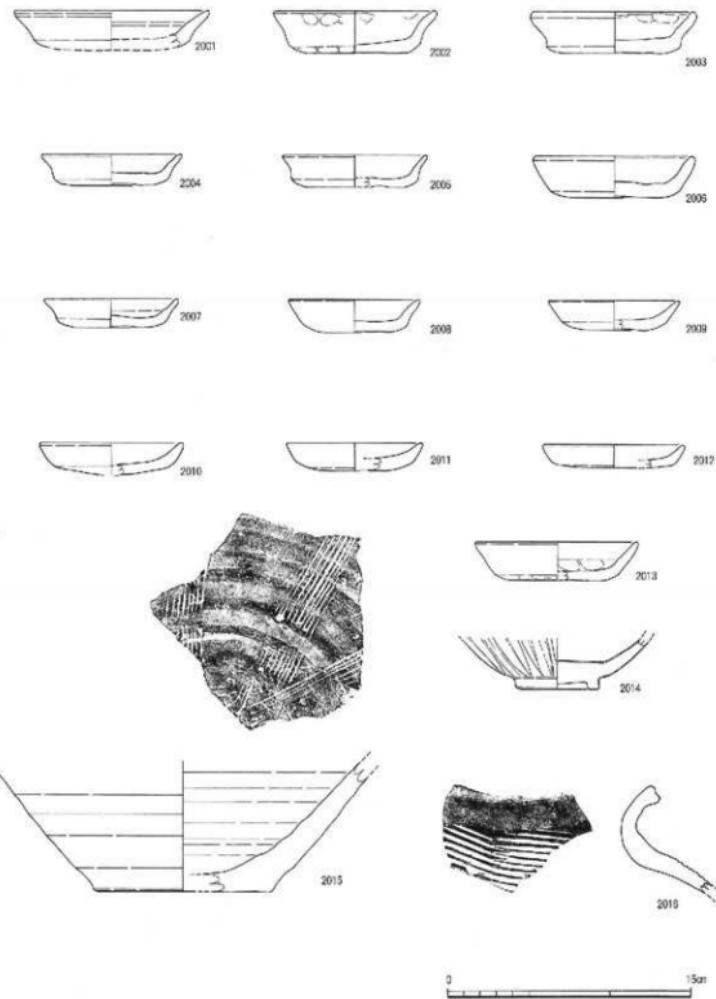
1506



1507



第25図 出土石器実測図 (1/3)



第26図 出土中世土器・陶磁器実測図（1／3）

IV 結 語

今回の調査では平地式建物1棟、方形周溝墓1基、古墳2基をはじめとして土坑、溝、井戸、多数のピットを検出した。遺物については弥生土器が大半を占めているが、石器も出土しており、とくに石鏃は県内で数少ない類例である。

弥生時代の遺構は平地式建物S 102、方形周溝墓S Z04をはじめ、多くの土器が出土した溝SD 07や土坑S K18・20・30などがある。また、石塚遺跡における弥生時代の平地式建物の検出は初めての事例である。

今回の調査で出土した弥生土器は弥生時代中期後半の穢部式～専光寺式段階のものと考えられ、小松市八日市地方遺跡の集落Ⅷ期～X期と併行し、今までの調査も含めた石塚遺跡で出土する土器のなかでは新しい時期のものに位置づけられる。器種は壺を主体として、壺、台付鉢、ジョッキ型土器等が見られる。文様は口縁部分を中心に櫛描絆杉文、櫛描斜格子文、櫛描連続指突文が施文されたものが多い。また、少量ではあるが、大型壺の頸部にめぐらせた貼付突帯の櫛描斜格子文や連弧文、網文などが見られる。口縁形態は、壺に連続押圧によって形成された波状口縁などが見られるがその割合は少ない。このほか、底部にヘラケズリを施すことが多くの土器に見られる様相である。また、栗林系土器が3点出土し、胎土中に海綿骨針が見られることから在地の製品ではあるが、頃城地域あるいは北信地域からの影響を窺うことが出来る。

石器は磨製石斧のほか石剣、石鏃、石鎌が出土している。石剣については石塚遺跡をはじめ、庄川採集品などで出土例が見られるが、転用されて小型化したものは県内では見られないものである。石鎌は富山市浜黒崎で出土したものについて2例目で、打製石包丁が収穫具として一般的な北陸地方で、あまり見られないものである。

古墳時代の遺構は古墳S Z01・03が検出されている。古墳自体に伴う遺物は無いため、時期は判定難いが、近接する都市計画道路地区で確認された石塚1号墳と軸がほぼ同一方向になっており、今回の古墳2基はこれらに関係するものと考えられ、古墳群の北東側への伸びりを窺える。

中世の遺構は、井戸、ピットが検出され、遺物は上部器皿、珠洲、青磁が出土している。圓錐整備によって連物跡の検出はされなかったが、9基の井戸の検出があり、隣接する「林地区」においても井戸が検出され、「都市計画道路地区」においても窪み遺構の上層から中世遺物が出土していることから中世集落の存在を窺うことが出来る。

今回の調査において、県内初と思われる弥生時代中期の平地式建物や石鎌の発見もあり、石塚遺跡の弥生時代中期の様相を考える上で大きな成果が見られた。とくに平地式建物の発見は重要である。現在の石塚遺跡の範囲のなかで北端部に位置していることから北側への遺跡の広がりを考えることができよう。そして、多くの土器が出土した上坑群は集落で使用された土器を廃棄した遺構として考えられる。また、石剣といった武器形石製品の山上は、石塚遺跡が他の弥生集落と様相が異なることを示していると考えられる。とくに、弥生集落としての石塚遺跡は、以前より、拠点的集落や中核的集落としての評価を得ていたが（赤澤 2002・岡田 2002）、今回の成果はそれをより裏付けるものとなったように思われる。今後の調査の進展によって、石塚遺跡における弥生時代の様相がさらに明らかになることを期待したい。

引用参考文献

- 高岡市史編纂委員会『高岡市史 上』(1957)
- 早川莊作『富山県の土器と石器』(清明堂1962)
- 上板成次・上野章「高岡市石塚遺跡発掘調査概要」『オジャラ』3 (1967)
- 上野章「弥生土器付、古式土師器」『富山県史考古編』(富山県 1972)
- 高岡市教育委員会『石塚遺跡—富山県高岡市石塚所在の弥生遺跡調査概報一』(1986)
- 高岡市教育委員会『石塚遺跡調査概報Ⅰ』(1987)
- 金沢市教育委員会『金沢市礪部運動公園遺跡』(1988)
- 高岡市教育委員会『石塚遺跡調査概報Ⅱ』(1988)
- 種定淳介「北陸の磨製石剣」『福井考古学会会誌』8 (1990)
- 金沢市教育委員会『専光寺養魚場遺跡』(1992)
- 高岡市教育委員会『市内遺跡調査概報Ⅰ』(1992)
- 高岡市教育委員会『市内遺跡調査概報Ⅲ』(1993)
- 金沢市教育委員会『上荒屋遺跡Ⅰ』(1995)
- 高岡市教育委員会『石塚遺跡調査概報Ⅲ』(1995)
- 高岡市教育委員会『石塚遺跡調査概報Ⅳ』(1996)
- 石川考古学研究会『武器・武具・馬具 石川県考古資料調査・集成事業報告書1』(1996)
- 岡本淳一郎「周溝をもつ建物について」『埋蔵文化財調査概報—平成8年度—』(1997)
- 高岡市教育委員会『市内遺跡調査概報Ⅴ』(1997)
- 高岡市教育委員会『市内遺跡調査概報VI』(1997)
- 北陸中世土器研究会編『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』(1997)
- 高岡市教育委員会『石塚遺跡調査概報V』(1998)
- 上田尚美「富山県内の石包丁について」『富山考古学研究』1 (1998)
- 石川考古学研究会『農工具 石川県考古資料調査・集成事業報告書4』(1999)
- 金沢市史編纂委員会『金沢市史 19考古』(1999)
- 高岡市教育委員会『市内遺跡調査概報IX』(1999)
- 久田正弘「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会会誌』92 (1999)
- 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団『平田遺跡』(2000)
- 斎野裕彦「石鎌の機能と用途（上）・（下）」『古代文化』53-10・11 (2001)
- 高岡市教育委員会『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』(2001)
- 赤澤徳明「北陸の弥生時代における拠点集落と環濠」『第5回中部弥生時代研究会発表要旨』(2002)
- 岡田一広「佐野台地における弥生集落のありかた」『第5回中部弥生時代研究会発表要旨』(2002)
- 岡本淳一郎「「周溝をもつ建物」の基礎的研究」『蜃気楼』(秋山進午先生古稀記念論集刊行会2003)
- 小松市教育委員会『八日市地方遺跡Ⅰ』(2003)
- 笹澤正史「栗林式土器と小松式土器」『第8回中部弥生時代研究会発表要旨』(2003)
- 上越市史編さん委員会『上越市史 資料編2考古』(2003)
- 福海貴子「小松式土器の成立について」『第8回中部弥生時代研究会発表要旨』(2003)

觀 察 表

固版番号	実測番号	分類	鉢径	池構	法面			成度	色調	触土	器皿調整		備考	
					口径	底径	器高				外側	内面		
1001	131	外生土器	甕	S102	17.0	(13.2)	良	外面10Y R3/1内面10Y R5/3	否	ハケメ (ナデなし)	ハケメ	ハケメ (ナデなし)		
1002	55	外生土器	甕	S102	11.9	(8.8)	良	外面7.5R8/7/内面7.5R8/4	否	ハケメ	ハケメ	ハケメ	口縁のみナダ	
1003	219	外生土器	甕	S102	18.0	(7.6)	良	内外面10Y/8/4	否	ハケメ (ナデなし)	ハケメ	ハケメ		
1004	117	外生土器	甕	S102	11.6	(8.3)	不良	外面7.5R8/7/内面10Y R2/4	否	ハケメ	ハケメ	ナダ		
1005	43	外生土器	甕	S102	11.7	5.5	やや良	外面10Y R5/2/内面7.5R8/2	やや否	ハケメ	ナダ	ナダ		
1006	270	外生土器	甕	S102		(45.6)	良	外面7.5R8/4/内面7.5R8/2	否	ハケメ・ミガキ	ハケメ	ケズリ	壁間に弱み目詰合中央	
1007	271	外生土器	甕	S102	8.7	6.9	26.9	土 内外面2.5Y8/2	否	ハケメ・ナダ	ハケメ	ハケメ	輪郭直線文、皮状文	
1008	183	外生土器	片付鉢	S102	26.9	15.0	良	外面5R7/6/内面10Y R7/3	否	ハケメ	ハケメ	ハケメ	口縁部上部に沈積(5枚、2枚)	
1009	133	外生土器	片付鉢	S102	22.0	(5.7)	良	外面7.5R8/7/内面10Y R7/2	否	ハケメ	ハケメ	ハケメ	比較文	
1010	98	外生土器	片付鉢 土器	S102	9.6	(5.3)	不良	外面7.5R8/4/内面10Y R7/3	やや否	ミガキ・ナダ	ナダ	ナダ		
1011	225	外生土器	甕	S102		5.7	(13.7)	良	内外面7.5R8/4/内面10Y R5/2	否	ハケメ	ハケメ		
1012	64	外生土器	甕	S102	8.8	(8.8)	良	外面10Y R8/3/内面2.5Y7/1	否	ハケメ (ナデなし) ミガキ	ハケメ	ハケメ	底面にケズリ	
1013	61	外生土器	甕	S102	9.4	(3.5)	やや良	外面2.5Y7/2~2.5Y4/1 内面2.5Y4/1	否	ハケメ・ケズリ	ナダ	ナダ	底面にケズリ	
1014	68	外生土器	甕	S102	(8.4)	0.7.7	良	外面10Y R4/6/内面2.5Y8/7	否	ハケメ	ハケメ	ハケメ		
1015	260	外生土器	土器 内盤	S102	長崎 3.6	短崎 3.0		外面10Y R3/3/内面2.5Y8/1	否	不明	不明	不明	土器用	
	50	外生土器	甕	S102		4.9	(3.8)	やや良	外面2.5Y4/2/内面2.5Y5/2	否	ハケメ	ハケメ	ハケメ	底部にケズリ
	57	外生土器	甕	S102		4.9	(3.3)	良	外面10Y R5/2~10Y R4/1 内面2.5Y3/1	否	ナダ (ハケメ無)	ハケメ	ハケメ	
	65	大断面	直	S102	8.6		(2.0)	やや良	内外面2.5Y R8/3	否	ナダ	ナダ	ナダ	
	128	外生土器	甕	S102		6.0	(5.3)	良	外面2.5Y R5/4/内面10Y R6/1	否	不明	不明	不明	
	1503	276	石器	石斧	S102	長崎 5.4	短崎 1.2						蛇紋岩	
	1505	277	石器	石斧	S102	長崎 3.3	短崎 1.5						白雲母	
	1016	214	外生土器	甕	S204	22.0	(16.1)	やや良	外面7.5R8/6/内面10Y R7/3	やや否	ハケメ (ナデなし)	ハケメ	ハケメ	羽状口縁
	1017	37	外生土器	甕	S204	20.4	(13.8)	不良	外面7.5R8/7/4/内面10Y R8/4	堆	ハケメ	ハケメ	ハケメ	一括ススキ
	1018	251	外生土器	甕	S204	15.1	5.7	20.3	良	内外面2.5Y R8/1	否	ハケメ・ケズリ	ハケメ	口縁部・底部にケズリ
	1019	26	外生土器	甕	S204	13.3	(8.8)	良	内外面10Y R6/2	否	ハケメ・ナダ	ハケメ・ケズリ	ハケメ	口縫部不整文
	1020	250	外生土器	甕	S204	11.6	6.0	18.8	やや良	外面2.5Y R7/4/内面10Y R7/3	否	ハケメ (ナデなし)	ハケメ	ハケメ
	1021	217	外生土器	新削盤	S204	10.5	7.4	15.4	やや良	内外面10Y R7/3	やや否	ハケメ (ナデなし) ミガキ	ハケメ	二孔・対穴
	1022	256	外生土器	甕	S204		(12.6)	良	外面2.5Y R5/6~10Y R7/4 内面2.5Y 7/3~2.5Y3/1	やや否	ハケメ・ミガキ	ハケメ	ミガキ(在地)	
	1023	24	外生土器	甕	S204	11.6		7.6	良	外面10Y R6/3/内面2.5Y R5/4	否	ハケメ	ハケメ	底部に二条の纹様 平行模様
	1024	38	外生土器	甕	S204	19.7	(11.7)	良	内外面10Y R2/3	やや否	ハケメ	ハケメ	ハケメ	羽状口縁状、點付斑帶
	1	外生土器	甕	S204	13.6		5.2	良	外面5Y R5/5/内面5Y R5/4	否	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ナダ	ハケメ	

固形番号	検査番号	分類	器種	遺構	法面 底塗 苔高			焼成	色調	施上	要否調整		備考	
					口径	底塗	苔高				外面10φ7/3内面10φ7/3	窓	外面調節	内面調整
4		弥生土器	甕	SZ04	5.0	3.9	やや良	外面10φ7/3内面10φ7/3	窓	ハケメ・ケズリ	不明	底部にケズリ		
5		弥生土器	甕	SZ04	4.6	2.9	良	外面7.5φ7/4内面7.5φ7/2	窓	ハケメ・ケズリ	ケズリ	底部にケズリ		
6		弥生土器	甕	SZ04	7.2	(6.2)	良	外面10φ7/3内面10φ7/3	窓	ハケメ・ケズリ	ハケメ	底部にケズリ		
7		弥生土器	甕	SZ04	6.3	3.8	やや良	外面10φ7/3内面2.5φ5/1	やや良	ハケメ・ケズリ	不明	底部にケズリ		
8		弥生土器	甕	SZ04	6.2	(6.7)	良	外面10φ6/2内面10φ6/2	窓	ハケメ	ミガキ			
9		弥生土器	甕	SZ04	6.3	(4.2)	良	外面10φ7/3内面2.5φ5/1	やや良	ナデ・ケズリ	不明	底部にケズリ		
10		弥生土器	甕	SZ04	23.2		4.4	良	外面7.5φ7/4内面10φ7/3	窓	ハケメ	不明	口縁に丸み目、剥落	文
11		弥生土器	甕	SZ04	6.0	(4.7)	やや良	外面2.5φ7/2内面2.5φ7/2~2.5φ6/1	やや良	ハケメ	ハケメ			
12		弥生土器	甕	SZ04	8.9	(3.1)	良	外面10φ7/2内面10φ7/2	窓	ハケメ	不明			
13		弥生土器	甕	SZ04	4.8	(2.0)	不良	外面10φ7/3~10φ5/1内面5φ4/1	やや良	ハケメ	ハケメ			
14		弥生土器	甕	SZ04	9.0	(2.6)	良	外面10φ8/3	窓	ナデ	不明	着底缺		
16		弥生土器	甕	SZ04	6.3	(7.0)	良	外面2.5φ6/6内面5φ2/4	やや良	ハケメ・ケズリ	不明	底部ケズリ		
17		弥生土器	甕	SZ04	6.8	2.4	不良	外面10φ8/3内面10φ7/2	無	ハケメ	不明			
18		弥生土器	甕	SZ04	7.6	(2.6)	良	外面10φ8/3内面10φ8/3	窓	ハケメ(ナデ消し)	ナデ	手状模・剥み目		
19		弥生土器	甕	SZ04	5.6	4.4	良	外面2.5φ5/3内面2.5φ6/2	窓	ハケメ	ナデ			
20		弥生土器	甕	SZ04	5.4	(8.4)	良	外面10φ7/2内面10φ7/2	窓	ハケメ・ナデ・ケズリ	不明	底部にナデ・ケズリ		
21		弥生土器	甕	SZ04	7.0	(3.2)	やや良	外面10φ6/2~10φ5/1内面10φ6/2	窓	ハケメ(ナデ消し)	ケズリ			
25		弥生土器	甕	SZ04	6.0	(3.6)	やや良	外面10φ7/4~10φ5/1内面10φ7/2~10φ6/2	やや良	ハケメ(ナデ消し)	不明	砂礫から多い		
27		弥生土器	甕	SZ04	5.9	2.5	やや良	外面10φ7/2内面10φ5/1	やや良	ケズリ・ハケメ(一部破缺)	不明	底部にケズリ		
28		弥生土器	甕	SZ04	6.2	(2.4)	良	外面10φ7/2内面10φ7/3	窓	ハケ・ケズリ	不明	底部にケズリ		
29		弥生土器	甕	SZ04	21.6	(15.7)	良	外面10φ7/2内面10φ7/2	やや良	ハケメ	ハケメ	スス有り		
30		弥生土器	甕	SZ04	17.6	(3.6)	やや良	外面10φ7/2~10φ4/1内面2.5φ7/2~10φ5/7	窓	ハケメ	ハケメ	スス有り 口縁部・剥み目		
34		弥生土器	甕	SZ04	21.0	(5.6)	やや良	外面10φ7/2~7.5φ5/1内面5φ5/1	無	ハケメ	ナデ			
35		弥生土器	甕	SZ04	7.1	(3.9)	良	外面7.5φ7/3内面2.5φ5/1	窓	ハケメ(ナデ消し)	ナデ・ケズリ	底部にケズリ		
38		弥生土器	甕	SZ04	18.0	(2.3)	やや良	外面10φ7/2内面7.5φ5/1	窓	ハケメ・ナデ	ナデ(ナデ消し)			
41		弥生土器	高杯	SZ04	1.8		4.4	やや良	外面2.5φ7/2内面2.5φ5/1	やや良	ハケメ(ナデ消し)	ハケメ(壁膜大)	底膜部・ナデ調整後 詰め目	
42		弥生土器	甕	SZ04	7.6	(3.3)	良	外面10φ6/4内面2.5φ2/1	窓	ハケメ・ケズリ	不明	底部にケズリ		
170		弥生土器	甕	SZ04		(5.4)	良	外面7.5φ8/4内面10φ7/3	窓	ハケメ(ナデ消し)	ハケメ			
216		弥生土器	甕	SZ04	5.7	(3.4)	良	外面10φ7/3内面2.5φ4/1	窓	ハケメ・ケズリ	ナデ	底部にケズリ		
230		弥生土器	甕	SZ04	7.6	(4.4)	良	外面10φ7/3内面10φ4/1	窓	ナデ	ナデ			
232		弥生土器	甕	SZ04	6.9	(2.9)	良	外面10φ8/3内面5φ8/1	窓	ハケメ	ナデ	底部にケズリ		

固版番号	測量番号	分類	器種	遺構	法量			色調	胎土	器内調査		備考		
					口径	底径	高さ			外側	内側			
	233	弥生土器	甕	SZ04	7.2	(3.3)	良	外面10YR7/7内面5Y5/1	瓦	ハケヌ	ナデ	底部にケズリ		
	234	弥生土器	甕	SZ04	7.6	(3.0)	良	外面7.5YR8/4内面7.5YR6/6	瓦	不規	ナデ	底部にケズリ		
	226	弥生土器	甕	SZ04	5.7	(4.0)	良	外面10YR6/3内面2.5Y4/1	瓦	ハケヌ	ナデ	底部にケズリ		
	236	弥生土器	甕	SZ04	10.8	(3.6)	やや良	内外面2.5Y8/3	やや青	不規	ハケヌ			
	237	弥生土器	甕	SZ04	5.4	(3.1)	良	外面10YR6/3内面2.5Y4/1	瓦	ハケヌ	ハケヌ	底部にケズリ		
	238	弥生土器	甕	SZ04	5.6	(3.0)	良	外面7.5YR6/2内面10YR4/1	瓦	ナデ		底部にケズリ		
	240	弥生土器	甕	SZ04	7.2	(2.7)	やや良	内外面10YR8/3	瓦	不規	不規			
	247	弥生土器	甕	SZ04	7.4	3.6	やや良	外面10YR7/3~5YR4/1 内面10YR7/2~7.5YR7/4	瓦	ハケヌ	ナデ			
	248	弥生土器	甕	SZ04	4.4	2.7	やや良	外面10YR6/3~2/1 内面3YR3/1	瓦	ハケヌ	ナデ			
	252	弥生土器	甕	SZ04	6.3	3.4	良	外面10YR7/3内面2.5Y7/2	瓦	ハケヌ (ナデ消し)	ナデ			
2012	47	上脚移	工	SZ04	8.5	6.9	1.5	良	外面10YR5/2内面10YR5/2	瓦	ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	内外表面不調整 タールが付着	
1078	212	弥生土器	甕	SD03	14.2		(7.8)	良	内外面7.5YR7/4	瓦	ナデ	ナデ		
	211	弥生土器	甕	SD03	27.2		(4.0)	やや良	内外面2.5Y8/3	やや青	ハケヌ	ナデ	に縁部に丸み目、内 面には弦紋	
	228	弥生土器	甕	SD05	15.2		(6.3)	良	内外面2.5Y8/2	瓦	ハケヌ・テテ	ハケヌ・ナデ	如意口縫	
	1026	111	弥生土器	甕	SD07	14.6	(13.1)	良	外面2.5YR2/4内面10YR7/3	瓦	ハケヌ	ハケヌ	ススキ穴	
	1026	192	弥生土器	甕	SD07	14.0	(14.5)	やや良	外面10YR7/3内面10YR7/3	やや青	ハケヌ	ハケヌ	ススキ穴	
	1027	118	弥生土器	甕	SD07	5.6	(14.8)	良	外面2.5Y7/2内面2.5Y6/4	瓦	ハケヌ (ナデ消し)	ハケヌ (ナデ消し)	底部にケズリ	
	1028	116	弥生土器	甕	SD07		5.2	12.8	良	内外面10YR6/2	瓦	ハケヌ	ハケヌ	底部に乳頭
	1029	142	弥生土器	甕	SD07	21.7		(7.4)	良	内外面2.5Y7/3	瓦	ハケヌ	ハケヌ	に縁部に丸み目、内 面には弦紋
	1030	109	弥生土器	甕	SD07	24.0		(7.4)	良	外面2.5Y6/7内面2.5Y6/5	瓦	ハケヌ	ナデ・ハケヌ	
	1021	259	弥生土器	甕	SD07		(11.1)	やや良	外面2.5Y8/3内面10YR8/4	やや青	ハケヌ	ハケヌ	壁部に丸み目貼付突 起	
	1022	257	弥生土器	甕	SD07		(14.8)	良	外面2.5Y7/3~2.5Y8/6 内面2.5Y7/2	瓦	ハケヌ	ケヌ・ナデ		
	1033	255	弥生土器	台輪附	SD07		(6.7)	やや良	外面2.5Y7/4~2.5Y8/3 内面10YR8/2	瓦	木口丸接続 竹接続	ハケヌ		
	1034	215	弥生土器	甕	SD07	19.5	5.6	23.7	良	外面10YR8/3内面2.5Y8/3	瓦	ハケヌ	ハケヌ	瓶穴あり、口部内 側に埋設庄抜
	1035	179	弥生土器	甕	SD07	19.5	4.9	24.1	やや良	内外面10YR6/4	やや青	ハケヌ	ケズリ	底部にケズリ?
	1036	263	弥生土器	甕	SD07	22.8	6.0	30.5	やや良	外面10YR8/2~2.5Y5/ 内面2.5Y6/5	瓦	ハケヌ	ハケヌ	に縁部に丸み目
	1037	272	弥生土器	甕	SD07	28.5	9.6	45.2	良	内外面2.5Y7/1	瓦	ハケヌ・エガキ	ハケヌ	に縁部に丸み目 による波状口縫
	1038	266	弥生土器	甕	SD07		(9.1)	やや良	外面10YR7/3~7.5YR7/3	やや青	異文・ナデ (ナデ消し)	ハケヌ	水跡・洗顔文・溝痕 文・基盤式(平地)	
	1039	273	弥生土器	甕	SD07	12.8	(56.8)	良	内外面2.5Y7/2	瓦	ハケヌ	ハケヌ	底部に丸み目貼付突 起	
	55	弥生土器	甕	SD07		(10.0)	(4.6)	良	外面10YR4/8内面10YR3/7	瓦	ハケヌ・ケズリ	次第	底部にケズリ	
	56	弥生土器	甕	SD07		5.3	6.8	やや良	外面2.5YR8/4内面2.5YR8/4	やや青	ハケヌ (ナデ消し)	ハケヌ (ナデ消し?)	底部にケズリ? ケズリ?	

回数	機器番号	分類	種類	速度	法量			焼成	色調	胎土	表面調整			備考	
					口径	底径	器高				外観	内面	内面		
60	新生土器	窯	SD07	22.1		(5.0)	直	外面10R1/2内面10R3/6	青	青	ハケメ (ナデ済し)	ハケメ (ナデ済し)	口縁引込み目		
62	新生土器	窯	SD07	11.1	(7.0)	やや良	外周2.5R8/3内面2.5R8/3	青	青	やや青	平滑	平滑			
63	新生土器	窯	SD07	7.2	4.3	不良	外面10R8/4内面10R8/4	青	青	ハケメ・ケズリ	不規	不規	底部にケズリ		
64	新生土器	窯	SD07	12.4		(5.0)	直	外面10R3/7内面10R4/7	青	青	ハケメ (ナデ済し)	ハケメ			
65	新生土器	窯	SD07	18.5		(6.0)	やや良	外面2.5R5/3内面2.5R5/3~10R5/3	青	青	ハケメ (ナデ済し)	ハケメ・ナデ	口縁引込み目		
66	新生土器	窯	SD07	13.9		2.9	直	外面10R6/3内面10R6/3	青	青	ハケメ	ハケメ	直縁にケズリ		
73	新生土器	窯	SD07	18.8		(2.6)	やや良	外面5R6/4~7.5R7/3内面5R6/4~7.5R7/3	青	青	ナデ	ナデ	口縁部に削み目、肩 秋文		
75	新生土器	窯	SD07	19.2		(13.1)	直	外面10R1/1.7内面10R3/6	青	青	ハケメ	ハケメ			
103	新生土器	窯	SD07	5.2	(7.0)	直	外周2.5R7/4内面2.5R7/5	青	青	ハケメ	ハケメ	ハケメ	底部にケズリ		
104	新生土器	窯	SD07	7.4	4.0	やや良	外面10R5/1内面10R4/1	青	青	ケズリ・ハケメ	ケズリ	ケズリ	底盤にケズリ後、ハ ケメ		
105	新生土器	窯	SD07	5.0	(3.5)	やや良	外面10R2/3~10R5/2内面2.5R1/1	青	青	やや青	ケズリ	ハケメ	底盤にケズリ		
106	新生土器	窯	SD07	7.6	(6.0)	直	外周10R2/6内面10R3/4	青	青	ハケメ	平滑	平滑	直縁にケズリ		
107	新生土器	窯	SD07	5.2	3.8	直	外面10R2/3内面2.5R6/1	青	青	ハケメ (ナデ済し) ケズリ?	ナデ	ナデ	直縁にケズリ?		
108	新生土器	窯	SD07	4.7	(3.9)	やや良	外面5.5R2/3~2.5R5/1内面10R2/2	青	青	ハケメ	不規				
110	新生土器	窯	SD07	6.7	5.4	直	外面10R8/4内面8R4/0	青	青	ハケメ (ナデ済し)	小青	小青	底盤部分、(青側より) 剥離	剥離にケズリ	
113	新生土器	窯	SD07	7.0	(2.0)	直	外面10R2/6内面5R1/2	青	青	ケズリ	ハケメ	ハケメ	直縁にケズリ		
114	新生土器	窯	SD07	6.8	10.2	直	青裏10R2/3内面10R6/3	青	青	ハケメ	ハケメ				
115	新生土器	窯	SD07	6.0	(3.0)	不良	外面10R3/3内面10R6/2	青	青	ハケメ・ケズリ	ナデ	ナデ	直縁にケズリ		
119	新生土器	窯	SD07	13.4		(5.5)	直	外面2.5Y7/2内面5R6/4	青	青	ハケメ (ナデ済し)	ハケメ			
123	新生土器	窯	SD07	7.2	2.4	直	外面7.5R9/2内面5R6/3	青	青	ナデ	ナデ		底部にケズリ?		
173	新生土器	窯	SD07	8.2	(4.1)	直	内外面2.5Y7/3	青	青	ハケメ ケズリ	ケズリ	ケズリ	底部にケズリ		
177	新生土器	窯	SD07	6.8	(18.0)	直	内外面10R7/3	青	青	ハケメ	ケズリ	ケズリ	一部剥離?		
179	新生土器	窯	SD07	19.5	4.9	26.1	やや良	外面10R6/4	青	やや青	ハケメ (ナデ済し)	ケズリ	口縁部の擦傷等		
180	新生土器	窯	SD07	16.8		(3.4)	直	外面2.5Y R5/4内面2.5Y R7/4	青	青	ハケメ (ナデ済し)	ハケメ (ナデ済し)			
182	新生土器	窯	SD07	17.0		(6.0)	直	外面10Y R4/4内面10Y R7/4~7.5Y R5/6	青	青	ハケメ・ナデ	ハケメ	口縁部に丸み		
186	新生土器	窯	SD07	6.6	6.6	直	外面2.5Y R7/4内面2.5R6/1	青	青	ハケメ	ハケメ・ケズリ	ケズリ	底部にケズリ		
194	新生土器	窯	SD07	5.8	(5.3)	やや良	外面10R2/3内面10R2/2	青	青	ハケメ (ナデ済し)	ケズリ				
196	新生土器	窯	SD07	20.4		(2.2)	やや良	外面10R8/3内面10R8/3	青	青	ハケメ (ナデ済し)	ナデ?	口縁部形状 スヌ有り		
209	新生土器	窯	SD07	5.7	(2.0)	不良	外面10R8/3内面10R8/2	青	青	ハケメ (ナデ済し) ケズリ後	ナデ	ナデ			
215	新生土器	窯	SD07	19.5	5.6	23.7	直	内外面2.5R8/3	青	青	ハケメ	ハケメ	二点の特殊孔 口縁部? ナデ に押え痕		
227	新生土器	窯	SD07	15.6		(6.0)	直	内外面2.5R8/3	青	青	ハケメ	ハケメ			

同定番号	実測番号	分類	路地	道構	法規		形状	色調	粒度	路側調整		備考	
					口径	並溝				外側	内側		
	239	再生土器	東	SD07		(7.6)	丸	内面10YR2/3	密	ハケメ	ハケメ・不明		
	266	再生土器	東	SD07		(9.1)	やや丸	外面10YR2/3 内面10YR2/3~7.5YR2/3	やや赤	褐色	ハケメ	葉林系土器、桟木上に現れる次第、5段の段差	
1040	148	再生土器	變	SK01	25.2	10.8	丸	外面10YR3/6 内面10YR2/6	密	ハケメ	ハケメ	コ様は波状口縁	
	86	再生土器	東	SK03	5.4	(4.0)	丸	外面2.5Y3/6内面5Y3/4	密	ハケメ・ミガキ	ナデ?		
1041	172	再生土器	著	SK18	17.3	(2.3)	やや丸	外面10YR5/2内面10YR2/2	密	ハケメ	ハケメ	に縫隙部に鉛み目	
1042	190	再生土器	東	SK18	16.0	(1.8)	丸	内面外周5YR8/4	密	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
1043	182	再生土器	東	SK18	7.2	(3.2)	丸	内面10YR2/2	密	ハケメ	不明	底部にケズリ	
1044	151	再生土器 (台付)	新	SK18	2.5	(1.6)	不規	外面10YR6/4内面5YR8/4	粗	ハケメ (ナデ消し)	ナデ	況難	
1045	224	再生土器 台付跡	SK18		9.4	(5.4)	丸	内外周10YR8/2	密	ケズリ ハケメ (ナデ消し)	ナデ	穿孔	
	158	再生土器	東	SK18	10.2	(4.5)	やや丸	外面2.5Y7/2内面2.5Y6/2	粗	ハケメ	ハケメ	口縁修理部に鉛み目	
	160	再生土器	東	SK18	5.9	(3.5)	丸	外面2.5YR6/3 内面2.5YH2/3	密	ハケメ	ナデ		
1046	167	再生土器	東	SK19	23.0	(22.2)	丸	内外周10YR6/3	密	ハケメ (ナデ消し)	ハケメ (ナデ消し)	口縁に小破缺(縫合部ケズリ)	
1047	254	再生土器	東	SK19	20.7	(2.7)	?	外面10YR6/4~10YR7/1 内面10YR5/3	密	ハケメ	ナデ	東口?	
1048	127	再生土器	著	SK19	5.2	(1.3)	丸	外面10YR6/2内面5Y6/1	密	ハケメ	ハケメ	底部にケズリ	
1049	221	再生土器	著	SK19	5.2	5.1	28	外面10YR7/2内面10YR6/2	密	ハケメ・ケズリ	ケズリ	底部ケズリ	
1050	174	再生土器	東	SK20	18.7	(17.9)	?	外面10YR7/2内面10YR5/1	密	ハケメ	二種ハケメ 削りケズリ	東に削向	
1051	133	再生土器	著	SK20	16.8		12.5	やや丸	外面2.5YR5/2 内面2.5Y5/2~3/1	密	ハケメ	ハケメ	口縁内面に鉛み目
1052	274	再生土器	東	SK20	24.6	6.3	32.4	丸	内面周2.5YR5/2	密	ハケメ	ハケメ	口縁部に丸み目
1053	264	再生J.器	東	SK20		(25.1)	丸	外面2.5Y5/2内面2.5Y4/1	密	ミガキ	ハケメ・ケズリ		
1054	193	再生土器	著	SK20	5.5	(10.5)	やや丸	外面2.5Y5~6~10YR7/3 内面2.5Y5~6~10YR7/3	やや密	ハケメ・ケズリ	不規	削りケズリ?	
1055	157	再生土器	東	SK20	22.2	(11.3)	丸	内外周2.5YR5/2	密	ハケメ	ハケメ	西浜広庭による小差(次回)	
1056	129	再生土器	著	SK20	14.6	(11.8)	丸	外面10YR7/2内面10YR7/3	密	ハケメ (ナデ消し)	ハケメ	口縫隙部に鉛み目	
1057	178	再生土器	著	SK20	7.0	(13.9)	やや丸	外面2.5YR7/6 内面2.5YR7/4~6/1	やや密	ハケメ (ナデ消し)	不規	底部にケズリ	
1058	125	再生L器	東	SK20	5.3	(11.8)	丸	外面2.5YR4/7 内面5YR1/5	密	ハケメ	ハケメ (ナデ消し)	底部にケズリ	
1059	147	再生土器	著	SK20	7.8	(7.2)	丸	外面10YR1/2内面6.5YR6/4	密	ハケメ	ケズリ?		
1060	145	再生土器	著	SK20	5.4	(7.4)	やや丸	外面10YR2/3~5Y5/1 内面10YR7/3	やや密	ハケメ	ナデ	底部にケズリ	
1061	168	再生土器	著	SK20	5.4	(5.3)	丸	外面10YR1/3内面10YR5/1	密	ハケメ (ナデ消し)	不規	底部にケズリ	
1052	121	再生土器	著	SK20	7.0	(4.0)	丸	外周2.5YR6/3内面10YR7/2	密	ハケメ	ナデ		
1053	174	再生土器	東	SK20	5.2	(3.4)	丸	外面2.5YR6/2内面2.5YR5/1	密	ハケメ	ハケメ		
1064	150	再生土器	著	SK20	6.9	(3.5)	丸	外面10YR2/3内面10YR2/1	密	ハケメ	ハケメ	底部にケズリ	
	169	再生土器	東	SK20	8.6	(3.7)	丸	外周2.5YR6/5内面2.5YH7/2	密	不明	不明		

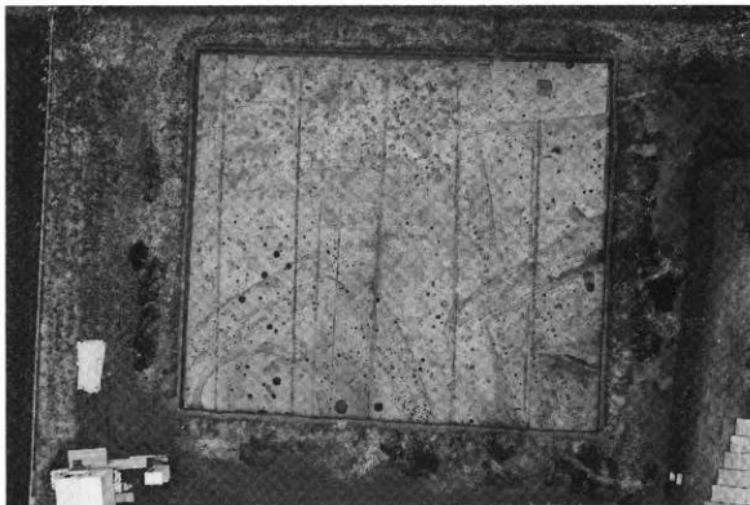
組版番号	実測番号	分類	西暦	地構	法量			焼成	色調	紹二	器皿調整		備考	
					口径	底径	高さ				外側頭部	内面頭部		
	174	弥生土器	夏	SK20	19.7		(7.9)	良	赤陶10YR7/2内面10YR5/1	青	ハケメ	ハケメ・カズリ	口縁部に錐込み目、縁部に丸みや突き出	
	191	弥生土器	夏	SK20	17.8		(7.5)	良	赤陶2.5YR0/3内面10YR4/1	青	ハケメ (ナマレシ)	ハケメ (ナマレシ)	口縁部に錐込み目、縁部に丸みや突き出	
	245	弥生土器	夏	SK20			(5.2)	良	内特陶10YR5/4	青	干漆	不明	刻み目新たや突き出	
	264	弥生土器	夏	SK20			(25.1)	良	外面2.5Y/1内面2.5Y/1	青	ハケメ (ミガキ)	ハケメ (カズリ)		
150	278	石器	健	SK20 (長さ) 16.0 (幅) 5.0 (厚さ) 0.9									再加工痕あり?	
1085	137	弥生土器	夏	SK27	6.3	(6.1)	良	赤陶10YR6/3内面7.5YR6/4	青	ハケメ (ナマレシ)	ケズリ	直線にケズリ		
1079	140	弥生土器	夏	SK27	11.6		(6.0)	良	赤陶10YR7/4内面5YR7/6	やや青	ハケメ	ハケメ	口縁部に錐込み目、内側には列点文、塑型に変形	
	187	弥生土器	夏	SK27	5.6	(2.1)	やや良	外面10YR7/3内面10YR7/2	青	ハケメ	ハケメ	直線にケズリ		
	231	弥生土器	夏	SK27	21.2		(2.5)	やや良	赤陶10YR/4内面10YR/2	やや青	ハケメ (Jナマレシ)	ハケメ (ナマレシ)	口縁部ナデ	
	268	弥生土器	夏	SK27	6.3	(2.0)	やや良	赤陶5YR5/6内面7.5YR2/3	やや青	干漆	不明			
1085	207	弥生土器	夏	SK30	21.0	5.1	22.7	良	外面7.5YR7/5	青	ハケメ	ハケメ	口縁部に錐込み目	
1086	261	弥生土器	夏	SK30	21.6		(24.5)	やや良	赤陶10YR7/4~4/2 内面5.5Y/7.3~3/2	やや青	ハケメ	ハケメ		
1087	195	弥生土器	夏	SK30	17.1		(17.1)	良	赤陶5YR6/6内面5YR3/5	青	ハケメ	ハケメ・ケズリ	口縁部羽状文	
1088	276	弥生土器	夏	SK30	16.8	6.6	33.3	良	赤陶5YR2/4~10YR8/4 内面	青	ハケメ	ハケメ	口縫に波状模様	
1089	76	弥生土器	夏	SK30	15.1		(6.1)	良	赤陶7.5YR7/4内面7.5YR3/4	青	ハケメ	ハケメ	口縁部ナデ	
1070	79	弥生土器	夏	SK30	20.2		(4.2)	良	赤陶7.5YR8/4内面7.5YR8/4	青	ハケメ	ハケメ	波状口縫に丸み目	
1071	98	弥生土器	夏	SK30	23.9		(2.7)	良	内外面10YR7/4	青	ハケメ (ナマレシ)	ハケメ	口縫部羽状文	
1372	144	弥生土器	夏	SK30	11.9	(5.8)	良	内外面5YR7/4	青	ハケメ	干漆	直線にケズリ		
1073	99	弥生土器	夏	SK30	6.0	(5.1)	やや良	赤陶10YR2/3~5Y/4/1 内面10YR7/3	青	ハケメ	ナマ ケズリ?			
1074	98	弥生土器	夏	SK30	5.2	(5.5)	良	赤陶7.5YR4/2内面7.5YR3/6	青	ハケメ	ハケメ			
	71	弥生土器	夏	SK30	5.4	2.0	やや良	赤陶7.5YR7/4内面7.5YR7/4	青	ハケメ・ケズリ		直線にケズリ		
	72	弥生土器	夏	SK30	6.3	(3.7)	良	外面7.5YR8/4内面7.5YR8/4	青	ナマ	ナマ	直線にケズリ		
	74	弥生土器	夏	SK30	4.6	2.2	やや良	外面10YR7/3内面2.5Y/1	青	ハケメ・ケズリ		直線にケズリ		
	75	弥生土器	夏	SK30	6.7	3.1	良	外面7.0YR7/3内面2.5Y/1	青	ケズリ	不明	直線にケズリ		
	81	弥生土器	夏	SK30	21.6		4.9	良	赤陶10YR6/3内面10YR7/3	青	ハケメ	ハケメ	口縁部に錐込み目	
	82	弥生土器	夏	SK30	15.6		3.2	良	赤陶5YR7/6内面7.5YR7/4	青	ハケメ	ハケメ	口縁部に錐込み目	
	83	弥生土器	夏	SK30	7.8	2.9	良	内外面10YR7/3	青	ハケメ	不明	直線にケズリ		
	84	弥生土器	夏	SK30	7.1	(4.2)	良	赤陶10YR7/4内面7.5YR7/2	青	ハケメ	不明	直線にケズリ		
	87	弥生土器	夏	SK30	5.6	(2.9)	良	内外面10YR8/3	青	ハケメ	ケズリ	直線にケズリ		
	89	弥生土器	夏	SK30	5.5	4.1	やや良	赤陶10YR7/3内面5Y/1	青	干漆				
	90	弥生土器	夏	SK30	5.6	(3.6)	やや良	赤陶2.5Y/6/3~2.5Y/5/3 内面2.5Y/6/2~5Y/4/1	やや青	ハケメ	ハケメ			

区段番号	実測番号	分類	鉱種	遺構	法算			焼成	色調	胎土	器皿調整		備考	
					口径	底径	器高				外面	内部	外面調整	内部調整
	93	弥生土器	甕	SK30		4.5	(3.8)	良	外面7.5YR2/4 内面7.5YR2/4	青	不明			底部ナデ
	94	弥生土器	甕	SK30		10.0	(6.5)	良	内外面10YR6/7	青	ハケメ	ナデ		
	95	弥生土器	甕	SK30		4.5	2.4	良	内外面10YR2/4	青	ハケメ (ナデ消し) ケズリ		底部ケズリ	
	97	弥生土器	甕	SK30		7.0	(3.3)	良	内外面5YR2/3	青		ハケ		
	100	弥生土器	甕	SK30	15.8		(3.5)	良	外面7.5YR1/2 内面7.5YR4/8	青	不明	ハケメ		
	120	弥生土器	甕	SK30	15.0		1.9	やや良	外面2.5YR2/4 内面2.5YR5/2	青	ハケメ	ハケメ (ナデ消し)	口縁部ナデ	
	205	弥生土器	甕	SK30		6.9	(5.8)	やや良	内面赤10YR7/3	やや青	ハケメ	不明		
	206	弥生土器	甕	SK30		6.9	(5.8)	やや良	内外面10YR2/3	やや青	ハケメ			
	261	弥生土器	甕	SK30	21.6		(24.5)	やや良	外面10YR7/4~10YR6/2 内面2.5YR1/3~2.5YR2	青	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	スス有り	
1504	279	石器	石斧	SK30	(底さ) 6.0	(幅) 3.2								緑色斑状斑系
1505	280	石器	石剣	SK30	(底さ) 5.0	(幅) 2.9	(厚さ) 0.8							粉板状型
1079	126	弥生土器	甕	SK40	15.4		(9.7)	良	外面7.5YR7/6 内面10YR8/3	青	ハケメ	ハケメ		
1083	135	弥生土器	甕	SK40	23.0		(4.3)	良	外面10YR7/4 内面10YR7/2	青	ハケメ	ハケメ	口縁部に沈み目	
	145	弥生土器	甕	SK40	9.8		(5.7)	良	内外面10YR8/3	青	ハケメ (ナデ消し)	ハケメ		
	181	弥生土器	甕	SK40		7.2	(5.0)	やや良	外面2.5YR7/2~10YR7/3 内面2.5YR6/1	やや青	ハリメ	ハケメ	底部にケズリ	
	198	弥生土器	甕	SK40	18.4		(3.5)	良	外面10YR5/3 内面10YR6/3	青	ハケメ	ハケメ	スス有り	
	203	弥生土器	甕	SK40		5.5	(4.8)	良	外面10YR7/3 内面5YR5/1	青	ハケメ・ケズリ	標識点ハケメ	底部ケズリ	
	220	弥生土器	甕	SK40	13.0		(6.2)	良	外面7.5YR8/5 内面10YR8/4	青	ハケメ (ナデ消し)	ハケメ (ナデ消し)		
	223	弥生土器	甕	SK40		5.9	(2.9)	良	外周10YR6/2 内面2.5YR4/1	青	ハケメ ケズリ (ナデ消し)	テテ	芯部ケズリ (ナデ消し)	
	69	珠州	陶器	SK41		8.0	4.3	良	外面2.5YR5/1 内面5YR5/1	青	ロウカケズリ	ロウカケズリ	壁リム	
1081	139	弥生土器	甕	SK42	17.4	5.8	9.7	良	外面10YR4/2 内面10YR3/8	青	ナデ・ミガキ ケズリ	ナデ・ケズリ	口縁部・刻み長 底部ケズリ	
1087	161	弥生土器	甕	SK47		5.2	(5.3)	良	内外面10YR7/3	青	ハケメ	ナデ	蓋部にケズリ	
1088	154	弥生土器	甕	SK47		5.4	(4.8)	良	内外面2.5YR7/3~5YR7/6	青	ハケメ	ハケメ	底部剥落	
	155	弥生土器	甕	SK47		4.5	(2.7)	良	外面10YR7/3 内面2.5YR5/1	青	不明	不明		
	197	弥生土器	甕	SK50		5.4	(4.4)	不良	外面2.5YR7/3 内面2.5YR6/4	青	ハケメ	不明		
	1075	39	弥生土器	甕	SZ01	16.9	(8.5)	良	外面10YR7/3 内面10YR7/3	青	ハケメ	ハケメ	口縁部ナデ	
	44	弥生土器	甕	SZ01		5.9	(4.8)	良	外周2.5YR8/2 内面2.5YR7/3	やや青	ケズリ・ハケメ (ナデ消し)	不明	底部ケズリ	
	45	弥生土器	甕	SZ01	9.0	(6.9)		良	内外面10YR8/2	青	(ハケメ後) (ナデ消し)	(ハケメ後) (ナデ消し)		
	226	弥生土器	台付甕	SZ03		(6.9)		良	内外面10YR8/2	青		不明		
	1080	243	弥生土器	台付甕	SZ03		(5.8)	良	外面10YR6/2 内面10YR2/1	青	ナデ・醜文	ナデ	蓋付底土器	
	1084	222	弥生土器	(台付) 甕	SZ03						ハケメ (ナデ消し) ケズリ	ケズリ (ナデ消し)		

実行番号	実施場所	分類	品種	温度	法量			接成	色調	鉢土	器皿調整		備考		
					口径	底径	高さ				外面10φ8/内面10φ7.3	黒	ナデ ケズリ?	ナデ・ハ ス	
36	弥生土器	便	SZ03	8.0	(13.2)	奥	外面10φ8/内面10φ7.3	黒	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	道門ケズリ				
116	弥生土器	便	SZ03	5.2	(2.8)	奥	外面10φ8/内面10φ7.2	黒	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	道門ケズリ				
189	弥生土器	便	SZ03	5.6	(3.4)	やや奥	外面10φ8/内面10φ7.2	やや黒	ハケメ	ハケメ	ナデ?				
210	弥生土器	便	SZ03	7.2	(2.5)	奥	外面7.5φ8/内面7.5φ7.5	黒	ハケメ・ケズリ?		道門ケズリ?				
229	弥生土器	便	SZ03	6.6	(3.1)	奥	外面10φ7/内面10φ7.3	黒	ハケメ (ナデ深し)	ナデ	不規				
2003	51	土器部	皿	SZ03	11.8		2.3	奥	外面10φ3/内面10φ2.4	黒	ナデ	ナデ	外底面不調整		
2007	40	土器部	皿	SZ03	8.2	4.6	1.8	奥	外面2.5φ7/内面2.5φ7.3	黒	ナデ	ナデ			
2011	50	土器部	皿	SE01	8.4		(1.7)	やや奥	外面10φ8/内面10φ6.3	黒	ナデ	ナデ			
2013	77	土器部	皿	SZ03	10.0	6.1	2.4	奥	外面5φ8/内面5φ6.5	黒	ナデ	ナデ	外底面不調整		
2014	46	青瓷 (直筒)	碗	SZ03	4.7	(3.2)	奥	外面10φ5/内面10φ5.2	黒	黒	黒	黒	発光 日-ア模 (太邑尺公版)		
2016	266	抹茶	便	SE01				奥	外面部8	黒	ロクロナデ タキヤ目	ロクロナデ タキヤ目			
2003	53	土器部	皿	SE05	9.8	5.8	2.6	奥	外面10φ7/内面5φ6.6	黒	ナデ	ナデ	ヌス育り 字がくくな?		
2009	32	土器部	皿	SE05	7.9	6.4	1.9	奥	外南10φ7/内面10φ2.3	黒	ナデ	ナデ			
2002	2	土器部	皿	SE06	9.8	6.3	2.7	奥	外面7.5φ7/内面7.5φ7.6	黒	ナデ	ナデ	ナズクね成り		
2004	3	土器部	皿	SE06	8.6	5.6	2.0	不規	外面10φ3/内面10φ1.3	黒	ナデ	ナデ	外底面不調整		
2006	143	二輪轂	車	SEFC6	9.7	5.8	2.6	奥	外南10φ7/内面5φ6.6	黒	ナデ	ナデ	内底面はへ調整		
1507	275	石製品	磨石	SE06	9.0	(4.5)								仕上げ砥石か	
262	石製品	钵	SE09	35.2	14.0	18.3								鉛造湯呑の可否性	
2015	52	珠列	銀鉢	P4	10.6	8.1	奥	外南5φ6/内面5φ7.1	黒	ロクロケズリ	コクロケズリ	黒	黒		
2005	49	土器部	皿	P167	8.7	6.2	2.0	やや奥	外面10φ7/内面8φ7.2	黒	ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	外底面不調整	
2008	58	土器部	皿	P167	8.1	5.8	2.1	奥	外面7.7/内面7.7	黒	ナデ	ナデ			
231	弥生土器	便	P363		6.2	(2.8)	奥	外面10YR6/29Rm10YR5/1	黒	ハケメ					
253	弥生土器	便	P373		13.7	(4.5)	奥	外面7.5φ7/内面5φ4.1	黒	ハケメ	不規		底面にケズリ		
155	弥生土器	便	楕円		8.0	(2.5)	やや奥	外南5Y7.6~2.5Y7.6	黒	ハケメ	ケズリ?		底面にケズリ		
162	弥生土器	便	楕円		5.6	(2.8)	奥	外南7.5φ7.3~2.5Y4/1	黒	ハケメ	ハケメ	ハケメ	底面にケズリ		
164	弥生土器	便	楕円		9.1	(2.6)	奥	外面部5YR7.6	黒					底面にケズリ	
46	弥生土器	便	楕円		1.6	7.9	1.8	奥	外面2.5φ7/29Rm2.5φ7.3	黒	ロクロケズリ			湯戸系統?	
165	弥生土器	便	楕円		19.3		3.4	不規	外面10X11/内面10YR8/3	黒	ハケメ	ハケメ	ハケメ	底面に開み目	
109	弥生土器	便	楕円		4.1	5.3	奥	外南7.5φ8/内面7.5φ6.6	黒	ハケメ・ケズリ	ハケメ	ハケメ	底面ケズリ		
145	弥生土器	便	楕円		6.3	(2.8)	奥	外面7.5YR7.4/内面10YR7.2	黒	ハケメ	ナデ	ナデ	底面にケズリ		
149	弥生土器	便	楕円		5.5	(3.3)	やや奥	外南10YR7.3~5Y4/1 内面10YR8/4	黒	やや黒	不明	不明	底面にケズリ?		

実測番号	実測器番号	分類	器種	遺構	法面			形成	色調	胎土	器面調整		備考
					口径	底径	底高				外面部調整	内面部調整	
	153	弦生土器	甕	素土	6.8	(4.3)	やや直	内外面10YR7/4	やや暗	ハケヌ	不明		
	154	弦生土器	甕	素土	7.4	(3.6)	直	外面10YR4/7 内面10YR5/2	青	ハケヌ	ハケヌ		
	156	弦生土器	甕	素土	5.2	(3.6)	仄	外曲10YR6/2 内曲5Y6/6	青	ハケヌ・ケズリ	ハケヌ	底部にケズリ	
	159	弦生土器	甕	素土	7.6	(2.9)	やや直	外曲10YR8/2 内曲2.5Y8/2	やや暗	ハケヌ			口縁部に刻み目、内面には滑状文
	153	弦生土器	甕	素土	7.7	(4.4)	直	外曲10YR8/3 内曲2.5Y6/2	青	ハケヌ	ケズリ	直部にケズリ	
	166	弦生土器	甕	素土	22.0	(2.4)	やや直	外曲10YR5/3～10YR4/3 内曲10YR7/3	青	ハケヌ	ハケヌ	口縁部に刻み目	
	171	弦生土器	甕	素土	(6.2)	(2.3)	直	外曲10YR8/3 内曲10YR7/2	青	ハケヌ・ケズリ		直部ケズリ	
	175	弦生土器	甕	素土	8.4	(2.0)	直	内外曲10YR8/4	青	ハケヌ	不規	直部にケズリ?	
	184	弦生土器	甕	素土	20.0	(3.8)	直	外曲10YR8/3 内曲10YR7/3	青	ハケヌ	ハケヌ		
1502	281	石器	石臼	素土	張径 11.2	底 7.0	厚さ 0.9						複数個

図 版



調査区全景（上空から）



調査区全景（北西から）



S102
完掘状況



S102
出土状況(1)



S102
断面



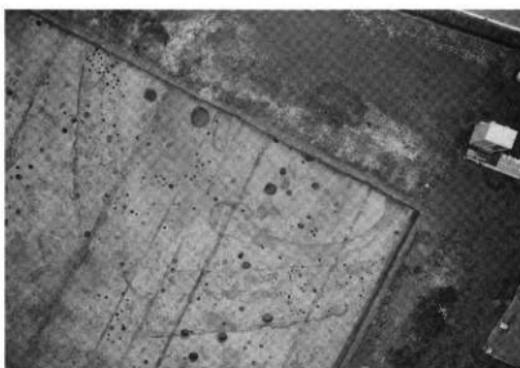
S102
出土状況(2)



S102
出土状況(3)



S102
出土状況(4)





S Z O 1
断面



S Z O 3
完掘状況



S Z O 3
断面



SDO 7
出土状況(1)



SDO 7
出土状況(2)



SDO 7
出土状況(3)



SD07
出土狀況(4)



SK18
出土狀況(1)



SK18
出土狀況(2)



SK 20
出土状況(1)



SK 20
出土状況(2)



SK 20
出土状況(3)



SK 30
斷面



SK 30
出土狀況 (1)



SK 30
出土狀況 (2)



S E O 4
曲物出土状況(1)



S E O 4
曲物出土状況(2)



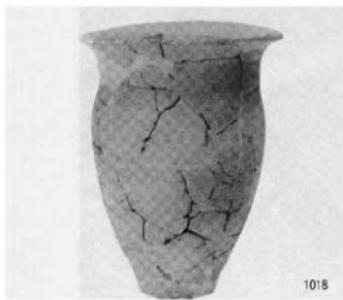
作業風景



1006



1007



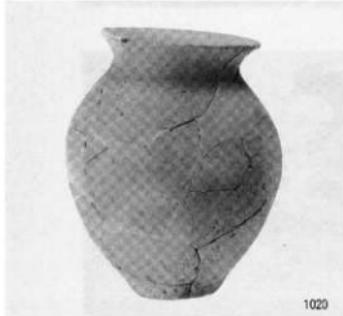
1018



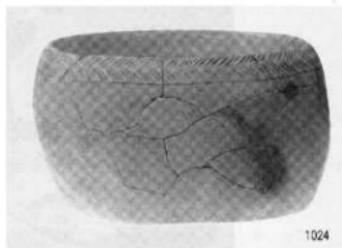
1010



1021



1020



1024

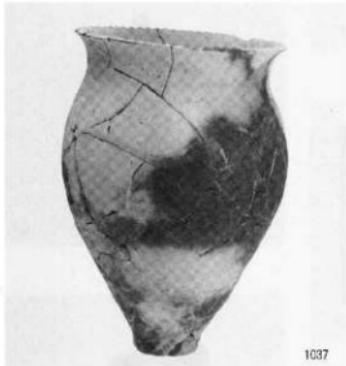
出土弥生土器 (1)



1034



1036



1037



1039

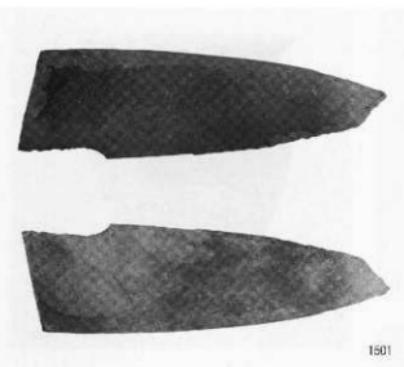


1068

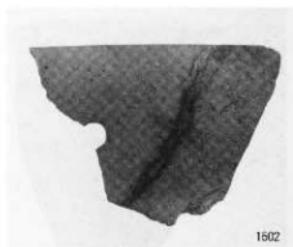


1061

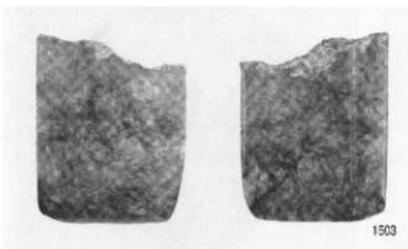
出土弥生土器 (2)



1501



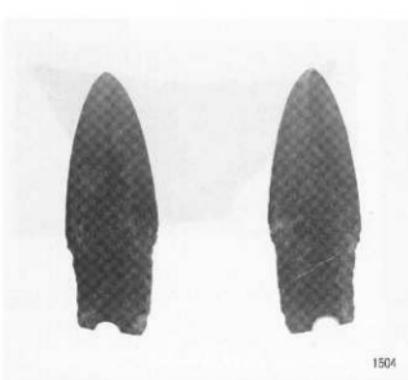
1502



1503



1505

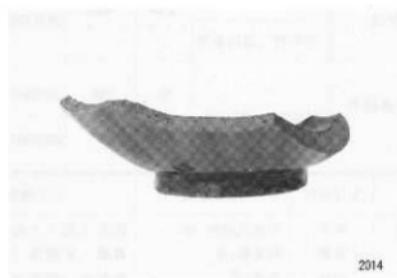


1504



1507

出土石器



出土中世土器

報告書抄録

ふりがな	いしづかいいせきちようさがいほう6							
書名	石塚遺跡調査概報VI							
副書名	介護老人保険施設「きぼう」建設に伴う調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第54冊							
編著者名	藤田 慎一							
編集機関	株式会社 中部日本歴史研究所 埋蔵文化財調査室							
発行機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号 TEL0766-20-1463							
発行年月日	西暦2003年12月26日							
所取遺跡	所在地	コート		北緯 ○○°○○'	東経 ○○°○○'	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石塚遺跡 (きぼう地区)	富山県高岡市 和田	016202	202158	36° 44' 07"	136° 59' 00"	20030519 ~ 20030630	1400m ²	介護老人 保険施設 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
石塚遺跡 (きぼう地区)	集落跡 古墳	弥生 古墳 中世	平地式建物1棟 周溝墓1基 方墳2基 土坑50基、溝20条 井戸9基	弥生土器・土師器・珠洲 青磁・木製品(曲物)・ 石製品(磨製石斧・磨製 石劍・石鎧・大型石包丁・ 石鏡・砥石)			富山県内初の 弥生中期の住 居址を検出	

高岡市埋蔵文化財調査概報 第54冊

石塚遺跡調査概報VI

—— 介護老人保険施設「きぼう」建設に伴う調査 ——

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2003年12月26日

印刷所 キクラ印刷株式会社

富山県高岡市鍛冶町48-2

